地図から消えた村

琵琶湖源流七集落の記憶と記録

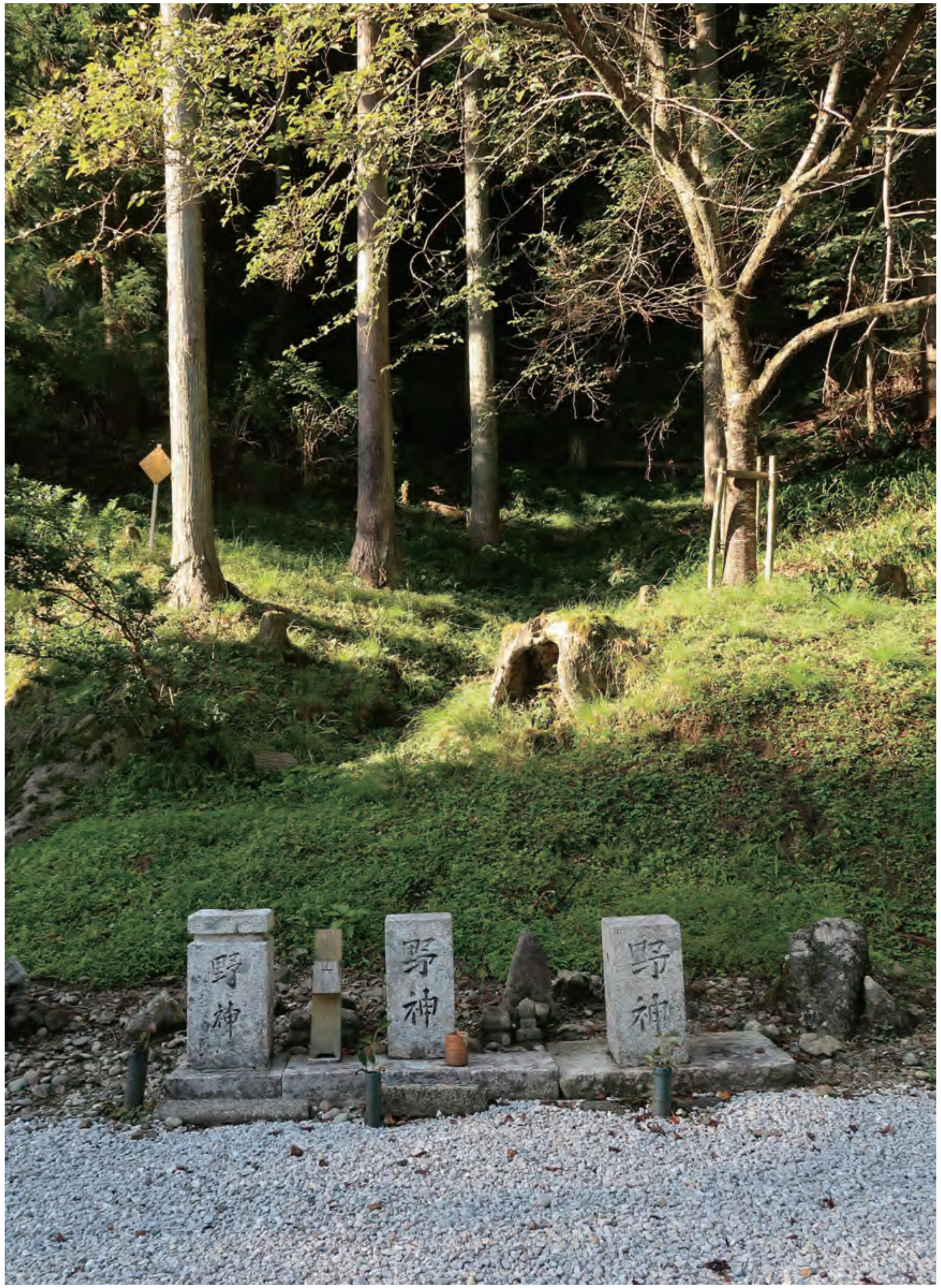
写真と文　吉田一郎

野神 六ヵ村の守護・六所神社（2021年）

河童淵（田戸地先 2021年）

人は巨樹に神を感じた（半明 2021年）

人は去っても地蔵は見守る（半明 2021年）



野神の現在。野神も移住先の余呉町東野の八幡神社の境内へ移された（2021年）

写真集『地図から消えた村』の出版にあたって

三山元暎　吉田一郎写真集出版委員会代表
Motoaki Miyama

ありがとうございます。吉田一郎写真集『地図から消えた村』を発行したいとクラウドファンディングによる資金集めの呼びかけいたしましたところ、大勢のみなさまの温かいご支援のおかげで出版することができました。

この写真集の著者・吉田一郎さんは、長浜市役所に勤務していたときの後輩で、広報をはじめ数々のまちづくりのプロジェクトやイベントの仕掛けに取り組んだ戦友ともいうべき仲間です。彼は行政マンとしてずば抜けた行動力の持ち主で、仕事を怠けたり、手を抜いたりといったことは一切しない有能な人でした。

それは与えられた本来の仕事にとどまらず、地域活動などあらゆる分野におよび、うまくやり遂げたから驚きです。少しでも気になることや興味を惹かれることがあればそのために行動を起こすタイプで、常に人の先頭に立っていました。

ことのほか湖北の民俗に興味と好奇心を持ち、これをライフワークとして、湖北の隅から隅まで訪ね回り、変わりゆく風土や人びとの暮らしを写真に記録し続けた人です。その写真の膨大さと、老境に入った今なお持ち前の馬力で、北にも南にもとんで活写する姿に感服しています。

かつて琵琶湖に注ぐ高時川の源流域にあった七つの集落が、人口の減少、生活の糧の先細り、大型ダムの建設問題などで集団離村し地図から姿を消しました。この写真集は、この集落での暮らしといまの記録を、未来への指針にしようと発行したものです。

吉田さんの写真を見て、経済的に豊かな暮らしではなかったかも知れないが、ここには山の恵みを生かし、村人同士が助け合って生活する仕組みがあったことが窺えます。神仏への祈りはシンプルながら、ここに暮らす人たちの日々の生活と深く結びついているのが見て取れます。その暮らしはつつましく質素ではあるが、村人たちは穏やかに心豊かに生きてきたのです。写真集を通じて故郷とは何か、豊かさとは何かを、感じ取っていただければと思います。

この出版に先だって余呉・妙理の里で開かれた吉田一郎「琵琶湖源流の美と暮らし写真展」には、山奥にもかかわらず九日間で約二千人の方々が来場されました。来場者の中には、吉田さんの写真に登場された奥丹生谷に暮らした方々自身もおられました。また多くのご家族も集（つど）われ、故郷を懐かしみ、また再会を喜ぶ場となりました。

写真展を見た元朝日新聞記者・吉川宏暉（ひろあき）さんから、こんな感想を寄せられました。写真集のねらいを、すべて言い当てているように思います。

「写真展ご苦労様でした。感動の連続でした。改めて写真記録の大切さを痛感しました。一枚一枚に『魂』が入っています。君の人柄とともに、被写体に真摯に向き合い、丁寧で深く突っ込んだ取材の結果だと思います。写真を撮るうえでの私の座右の銘の『写心』です。『心で撮る、相手の心を撮る』記録だと思います。人物写真を見ると、どの人たちも君を信頼し、緊張もせず、普段通りの表情でカメラに収まっています。ここまで信頼されるまでには相当通い、苦労されたことと思います。一連の記録は、地域ばかりでなく、長浜市、滋賀県、延いては日本の貴重な資料でしょう。是非、写真集にして後世に残して下さい」

写真集には、奥丹生谷の関係者の方々が写真展に来場された場面も掲載しています。

最後になりましたがこの写真集出版にあたり、資金集めや編集に携わっていただいた皆さん、写真展開催に東奔西走して汗を掻いて下った皆さんに心から感謝しつつ、ともにこの出版を喜びたいと思います。

目次

写真集『地図から消えた村』の発刊にあたって　三山元暎

第一章　**奥丹生谷七つの村** …… 13

第二章　**豪雪の村** …… 21

第三章　**祈り** …… 34

第四章　**暮らし** …… 74

第五章　**分校** …… 104

第六章　**遷座（神を移す）** …… 112

第七章　**離村** …… 132

〝懐かしい未来〟を照らす希望の写真集に　吉田一郎 …… 160

対談　大西暢夫×吉田一郎「山に生かされる」 …… 164

吉田一郎写真展「琵琶湖源流の美と暮らし」 …… 170

離村者たちの今、昔 …… 174

あとがき

コラム

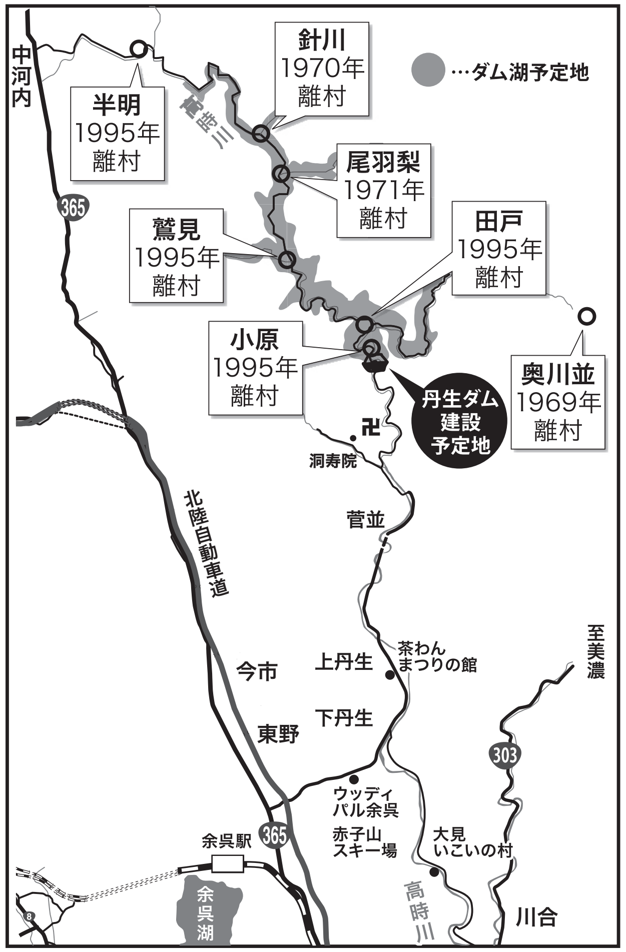
ちくま日本文学全集　宮本常一『子に生きる』を読んで …… 22

よじろう地蔵 …… 25

五六豪雪 …… 32

クマ撃ち名人・久保吉郎さん …… 88

長浜のペン画家小野信吾さんの丹生谷エレジー …… 158



戦国時代までの北国道は、高時川に沿って北上し、奥丹生谷を通るルートでした。上丹生の橋の架け替え費用を美濃の二十五ヵ村も負担している（余呉町史）ことから、いかに重要な道であったかがわかります。

第一章 奥丹生谷七つの村

琵琶湖の北の高時川の源流で一九六九（昭和四十四）年から一九九六（平成八）年にかけて七つの村が地図から消えました。奥川並（一九六九年離村）、針川（一九七〇年離村）、尾羽梨（一九七一年離村）の三つの村は生業だった製炭業衰退という経済的理由からでしたが、半明、鷲見、田戸、小原（いずれも一九九五年離村式）はダム建設計画（のちにダム計画は中止）に伴う立ち退きによるものでした。

「地図から消えた村」と聞くと、貧しい、侘しい、悲しい、苦しい生活を強いられてきたようなイメージを抱きますが、奥丹生谷は違いました。山からの恵みを受けて、村にはお金がなくても一年中暮らせる生活環境と、大家族のような自治組織がありました。しかし、燃料革命という時代の波を乗り越えることはできませんでした。

戦国時代に柴田勝家が中河内から椿坂に通じるルートを開くまでは、この奥丹生谷に畿内と北陸を結ぶ北国道が通っていました。丹生谷は「朱」の赤い土、紅殻（弁柄ともいう酸化第二鉄）を産出したため江戸時代は天領となっていましたし、その街道筋から東へ入った美濃との境に近い奥川並は彦根藩領で「黒木」と呼ばれるご御用炭を産出しました。奥川並には、やまふじ踊、鐘鋳(かねい)踊り、大黒踊り、綾踊りといった踊りの記録が残ります。俳諧も盛んでした。この豪雪の村は東京都の議員、会社経営者、検事、駅長など、多くの人材を輩出していたのです。

集団離村で集落跡の形はなくなっていますが、山や川や巨樹巨岩から往古の歴史を偲ぶことができます。本書はこれらの村の記憶と記録です。

1968 年撮影

奥川並（おくこうなみ）

離村年　1969（昭和44）年11月25日（離村式）
戸　数　15戸、51人
氏　神　八幡神社
寺　院　浄土宗と曹洞宗の2寺
学　校　丹生小学校奥川並分校
生　業　製炭。良質の黒木炭を産出
村の概要　村の概要／美濃国廣瀬村や横山村から移住して村ができたとされる。叩くと金属音がして火持ちの良い高級の黒木炭が生産された。関ケ原合戦後に石田三成の家臣・島左近が隠れ住んだとも伝わる。一戸平均耕地面積は2、3アール、反収225キログラム（昭和40年調べ）と平野部の半分以下。家は茅葺屋根だが赤身欅のがっちりとした家が多く見られた。踊りや俳諧が盛んだった。

1975 年撮影

針川（はりかわ）

離村年　1970（昭和45）年11月
戸　数　14戸、72人
氏　神　春日神社
寺　院　浄土宗・長福寺（もと天台宗）
学　校　丹生小学校尾羽梨分校
生　業　製炭
村の概要　役場から21キロメートル、丹生谷の最奥に位置する。奥川並の集団移住の次に針川も区民連署の移住要望書を余呉村へ出す。余呉町制施行の前年だった。余呉村は財政力が弱く、針川区は共有林を売却して移転費用を捻出した。

1975 年撮影

尾羽梨（おばなし）

離 村 年　1971（昭和46）年11月9日（離村式）
戸　　数　10戸、38人
氏　　神　日吉神社
寺　　院　浄土宗・福寿寺（もと真言宗）
学　　校　丹生小学校尾羽梨分校
生　　業　製炭
村の概要　わが国の木地業の発祥地と伝わる近江の小椋谷（旧永源寺町）の木地師集団の一部が尾羽梨山に定住したと伝わる。『高時川ダム建設地域 民俗文化財調査報告書』滋賀県余呉町刊には、「尾羽梨川上流の堰堤（尾羽梨ダム）を一回りした奥に轆轤師という平があり、江戸末期6軒の木地屋が住んだ跡で、その中の寺屋敷と伝えられた所には数基の古い墓石が埋まるように今も残っているらしい」と記されている。

1975 年撮影

鷲見（わしみ）

離 村 年　1995（平成7）年10月22日（離村式）
戸　　数　14戸、東野に移住
氏　　神　八幡神社（東野、八幡神社に合祀）
寺　　院　浄土宗西念寺、東野に新築
学　　校　丹生小学校尾羽梨分校
生　　業　製炭
村の概要　集落の下流1キロメートルの対岸に大鷲が棲んでいたという岩窟があり、そこに鷲見大明神（野神）が祀られていた。大鷲は旅人を悩ませたため椿坂の郷士が射て殺したという伝説が伝わる。村の中央を高時川の支流鷲見川が流れ、川の水を生活用水としてきた。

1994年撮影

田戸（たど）

離村年　1995（平成7）年8月24日（離村式）
戸　数　6戸、今市へ移住
氏　神　春日神社（今市、佐味神社に合祀）
寺　院　曹洞宗洞寿院
学　校　丹生小学校小原分校
生　業　製炭
村の概要　奥川並への分岐点にあり、丹生北部購買販売組合が置かれた奥丹生谷6ケ村の中心だった。びわ湖が望める安蔵岳山頂に祀られていた聖観音像、不動明王像が田戸区集会所の床の間に安置されていた。むらの直下の淀みを近郷の人は「河童淵」と呼んだ。昭和30年代までオコナイには弓打ち式が、野神には太鼓踊りが行われ、11月9日には山の神まつりが行われてきた。

1994年撮影

小原（おはら）

離村年　1995（平成7）年8月24日（離村式）
戸　数　9戸、38人、今市へ移住
氏　神　春日神社（今市、佐味神社に合祀）
寺　院　曹洞宗洞寿院
学　校　丹生小学校小原分校
生　業　製炭
村の概要　ショウズと呼ばれる湧水井を中心に村が開けた。鎌倉時代、後嵯峨天皇の第3皇子が村の南の御所ケ平に住み小原籠の製法を伝えたとされる。そこにあった太多野明神を移したのが春日神社という。明治時代から村に籠屋組合があったほど。籠の技は奥丹生谷の村々に広まった。小さな観音像入り厨子を1カ月毎に家から家へ回す観音講が行われてきた。

1994年撮影

半明（はんみょう）

離村年	1995（平成7）年8月17日（離村式）
戸数	12戸
氏神	愛宕神社（中河内・広峯神社の末社）
寺院	浄土宗・西光院（中河内）
学校	中河内小学校
生業	製炭
村の概要	中河内の枝郷。中河内は北国街道の宿駅で奴振り行列や太鼓踊りなどの伝統行事が伝わるが、それらの行事は半明からの応援で執り行われていた。昭和32年12月、味噌つきの火から7戸が全焼。大火後縫製工場が誘致される。丹生ダムの水没地域ではなかったが、水源地域特別指定地域に指定されて移住が決まり、鷲見、田戸、小原に先がけて村は消えた。

第二章

豪雪の村

奥丹生谷はわが国屈指の豪雪地帯。一九二七（昭和二）年には伊吹山で十一メートルという世界最高の積雪を記録しており、一九三五（昭和十）年に奥川並で三丈（約九メートル）を超えました。村は水没ならぬ雪没してしまったのです。一九三四（昭和九）年から十五年にかけて、山（横山岳）をひとつ隔てた土倉鉱山では雪崩で二十六人もの死者を出しています。

当時の豪雪記録写真はないのですが、民俗学者の宮本常一は昭和十年豪雪の三年後に奥川並と奥丹生谷の村々を取材し聞き書きを克明にまとめています。筑摩書房刊『ちくま日本文学全集』に収録された近江湖北の豪雪の村の記録『子に生きる』を読んで、宮本常一が訪ねた奥丹生谷と私の体験を対比しつつ次項で紹介します。

宮本常一は一九〇七（明治四十）年山口県生まれ。大阪で小学校の教員を務めながら、柳田國男の民俗学に興味を持ち、教員を辞めて全国各地の人びとの暮らし、文化、経済を調査研究しました。七十三歳で死去するまでに調査した村は三千以上。歩いた距離は十六万キロメートル。調査日数は四千日とも言われます。宮本が日本の民俗誌でなく民俗生活誌の本格的な調査に入ったのは一九三九（昭和十四）年、三十二歳からと言われますが、何とその前年の一九三八（昭和十三）年に奥丹生谷を調査していたのです。録音テープを起こしたのかと思えるほどの詳細な取材がされています。

一九八一（昭和五十六）年の豪雪は、鷲見で中河内と同じ六・五メートルを記録しました。奥丹生谷は完全に孤立し、災害救助法が発動され、自衛隊による救援物資の空輸が行われたほどでした。その時の小原、田戸のようすを私は取材しました。

コラム

ちくま日本文学全集　宮本常一
『子に生きる』を読んで

「近江の湖北は雪深いところである。柳ヶ瀬のトンネルあたりは冬になるとよく汽車の往来をはばむ。そういうところに人々はどんなに暮らしているのだろうか」、宮本常一の『子に生きる』の書き出しです。北陸線中之郷駅から峠を越えて高時川に出た宮本常一は、雪崩の跡を踏み越えて田戸まで歩きました。そこで宿を取りましたが、宿はなく民家に泊めてもらい田戸の区長さんから聞き取りをされています。暮らし向きのことを聞こうと思いましたが、先にこの地がいかに住みにくいかを聞かされたといいます。幾度もの水害、全戸が消失した大火、毎年繰り返される雪害にもかかわらず、田戸の方たちは、村を捨てて出ていくものはいなかったことが記されています。

奥丹生谷の雪崩について詳細な描写が見られます。

根雪の上に新たに積もった雪によって引き起こされる「アワ」の威力は凄まじく、やわらかな雪であるが、大きな雪玉となって崖を下り、一種の雪旋風のようなもので、その通って行くすじにある木も何もみなねじ折ってしまうと書かれています。小原と田戸の間の杉の木は、私が撮影した昭和五十年代も、六十年代でも、やはり毎年春には、何本も折れていたのです。アワの出る谷を「アシタニ」というが、田戸の周辺にはアシタニが多い。宮本常一が記している田戸の川向いのアシタニは、安蔵岳の急斜面のことでした。私はこの斜面に上り、田戸集落を見下ろす写真を撮影したのです。

雪の奥川並集落（故増田巌さん提供）

春になると雪は、太陽に照らされた表面ばかりでなく、大地に接したところからも溶けはじめます。大地との摩擦が減り、重みでズレはじめ、ついには雪崩を起こす。これが「ノマ」なのです。ノマは、山肌までえぐり取ってしまいます。ノマの跡地は焼き畑の場所として利用されることが多いのです。

昭和十年の大雪についても宮本は記しています。昭和十年の大雪は奥丹生谷では三丈（約九メートル）積り、二十日間交通が途絶えました。深雪の中、余呉村から村長、県職員、赤十字の医者と看護師が救助隊を組織して田戸までたどり着いたのです。いろり火一つが家の明かりでした。雪底の穴の中での暮らしは過酷で、田戸、小原、奥川並、鷲見、尾羽梨、針川で九十六人もの病人が出たといいます。救助隊はみんな何升もの米を背負ってきてくれたのでした。

アワやノマや、大雪がなくても、厳しい冬について宮本は記しています。冬に病気になると医者に診てもらうことができません。亡くなった場合は、雪の中に遺体を埋めておき、雪解けを待ってから菅並まで運んで検死をしてもらったといいます。暖かな瀬戸内の島で育った宮本からすれば、田戸の区長の話は想像もできない世界であったことでしょう。

田戸の区長から奥川並地区は紹介者がいないと警戒されますよと助言された宮本でしたが、それほどでもあるまいと訪ねた奥川並では受け入れてもらえずに田戸に引き返します。

「これからどこへ行きます？」と、田戸区長の奥さんから声を掛けられ、「お宮へ参ってきます」と、宮本は答えた。

そこから奥さんの態度がガラリと変わったといいます。神仏を敬う気持ちの強い奥丹生谷の人々にとって、神社に敬意を払った宮本の行動が共感を呼んだのでしょう。

奥さんの話では、生まれた子どもが無事に育つのはまず半分だといいます。医者もなく、富山の置き薬くらいで間に合わすので子どもの命は運命に任すより仕方がない。しかし育った子の命は強靭です。はげしく苛酷な自然とのたたかいと貧しさの中を生き抜いてきたものには、おのずから強さが備わることが読み取れます。

子どもが生まれたらエヅメ（カゴ）に入れて山に仕事に行き、帰ると子どもは泣き疲れて寝ていました。歩き始めたら川に落ちないか心配が増えたのです。子どもを自分で見ることができる雪の冬が待ち遠しかったと、山に暮らす母の気持ちが記されています。

私と奥丹生谷との付き合いは、一九七一（昭和四十六）年十二月八日の針川集落が離村した日が最初でした。前年に奥川並が離村されたニュースを知り、針川の離村はぜひとも記録したいと思ったのです。

五六豪雪（一九八一年）の時も奥丹生谷に二月一日、一人で向かいました。菅並に車を停め、雪道を踏み固めながら小原まで歩いたのです。

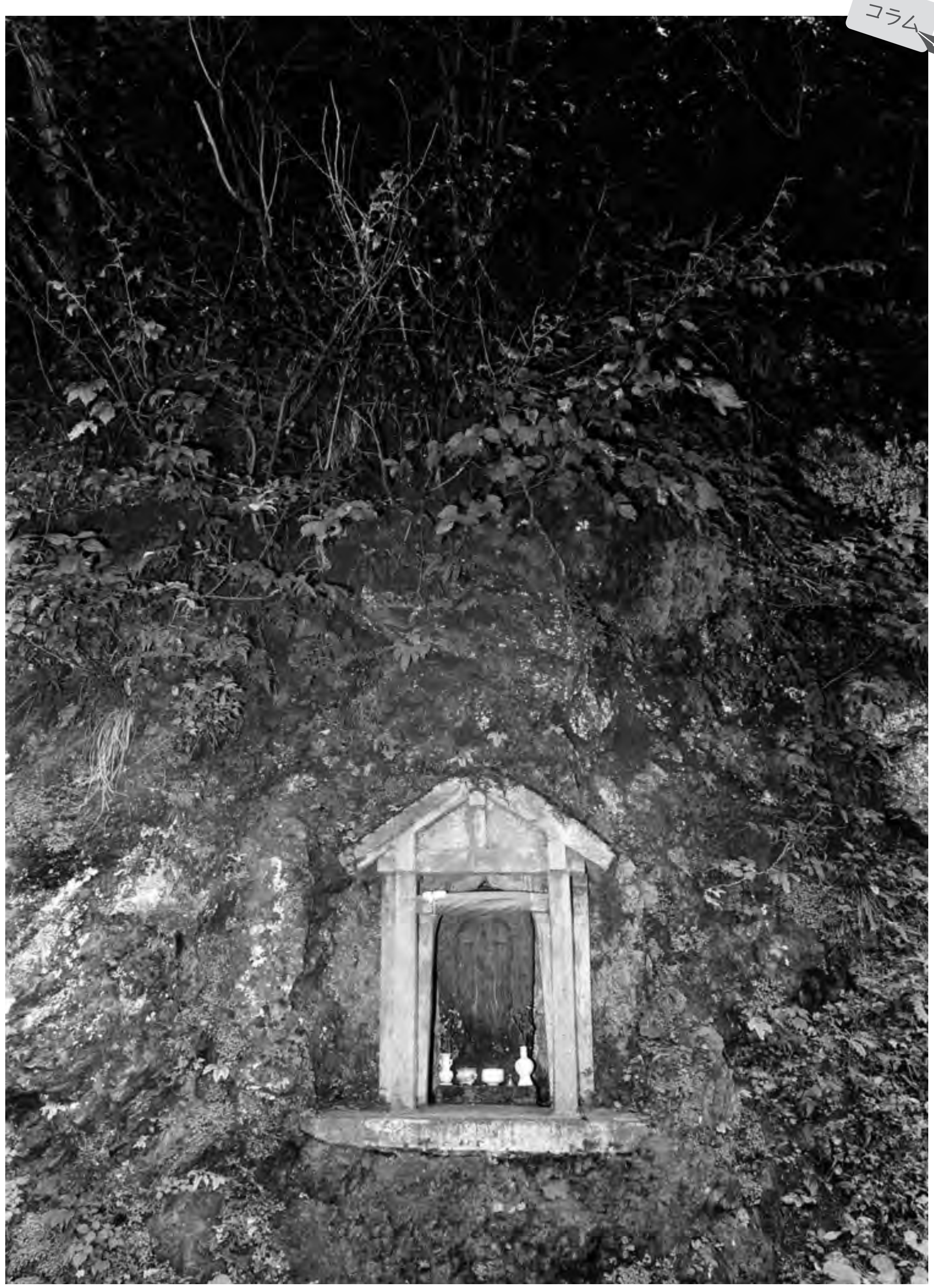
小原に着くと、雪に埋まった家を掘り出している方から声を掛けられました。

「誰ときたんや」

「一人で歩いてきました」と答えると「あほたれ！アワにおうたらどうするんや」、「川に落ちたらどうするんや」と目を剥いて怒り、私を心配してくれたのは小原の山﨑傳さんでした。これが山﨑さんとの出会いでした。これ以後、私は奥丹生谷に頻繁に通うことになったのです。

（吉田一郎）

コラム



1935年豪雪時、郵便配達中に高時川に転落死した鷲見の橋詰與治郎さんを弔う石地蔵。岩肌の祠にいつも新しい榊や水が供えられていたので「このお地蔵さんには深い由緒があるに違いない」と思ってカメラに収めておいた。
この写真集の追加取材中に橋詰與治郎さんを祀る石地蔵であることを知った。
現場は「よじろう落ち」、地蔵は「よじろう地蔵」と呼ばれていた（1981年）

昭和十年の豪雪で転落死した
郵便配達人を弔う

よじろう地蔵

鷲見と田戸の間の道路端の岩肌をくりぬいて、コンクリートの厨子にお地蔵さんが祀られていました。それは、一九三五（昭和十）年の豪雪のとき、雪をかき分け鷲見まで郵便を届ける途中に高時川へ転落死された郵便配達人を弔う地蔵でした。正規の郵便局員が床に伏したため、村の人が代役を務めました。「この雪では配達は無理」との声をよそに「この手紙を今か今かと待っている人に一刻も早く届けてやらねば」と使命感に燃える配達人さんが鷲見の手前で高時川へ転落されたのです。随行者の知らせを受けて、村中総出で捜索されましたが見つかりませんでした。鷲見から東野に移住された谷口千代子さん（一九三一年生まれ）は「私が五歳の時で、主人（谷口長三さん）は小学校五年生の時でした。一週間後に川合（木之本町）の堰堤で見つかりましたが、そのとき頭の髪はなく片足に足袋だけが残っていた、と聞いています」としんみり語っておられました。郵便配達員は鷲見の橋詰與治郎さんだったのです。

地蔵は一九九五（平成七）年の離村後に鷲見の移住先の東野・西念寺の境内に移されました。

雪の奥丹生谷・小原付近（1970年頃）
（尾羽梨分校勤務・柴田郁造さん提供）

56豪雪のときの田戸集落。正面の山が安蔵岳。
集落を巻くように高時川が流れる。右奥の4キロメートル先に奥川並集落があった（1981年2月1日）

56豪雪・田戸。人は２階から出入りしていた。
右の瓦屋根が今井巳一宅（1981年2月1日）

56豪雪・小原。茅葺屋根は雪の重みで傾いている。
家を雪から掘り出す山﨑傳さん。
積雪はこの時点でも約４メートルあった（1981年2月1日）

56豪雪・小原。雪の中から家を掘り起こす尾﨑正雄さん一家。
棟木が折れている（1981年2月1日）

コラム

五六豪雪

一九八一（昭和五十六）年の豪雪は戦後最大の被害を出しました。次頁の新聞報道でも見られるように、一月十一日から降り出した雪は、一月二十一日には鷲見も中河内も六・五メートルに達し、鷲見では食糧が底をついて区長からＳＯＳが発せられました。

「アワで高時川も家の前の鷲見川も埋まり、集落は何も見えない状態になった。冬越しを決めていた三人以外は高月などへ下りる予定だったが、一晩に二メートルも積もったので身動きがとれず十一人が村に残ることになった。米やみそ、野菜をみんなで分けたが、すぐに底をついてしまった」と谷口長三さんは回顧されています（『広報よご』一九八一年二月二十八日号）

北陸線は雪で運休、道路の除雪も進まない。長浜市内の小学校のカマボコ型の屋根は潰れる、工場の屋根も抜ける、通勤もできない、食糧も買えないという状況が続き、滋賀県北部に災害救助法が発動されて自衛隊が出動、緊急物資の空輸が行われました。だが、自衛隊の除雪も奥丹生谷までは届きませんでした。

この年私は三十九歳。一九八〇年四月に長浜市の広報係長から商工係長に異動していましたが、家や勤務先の除雪に追われながら、「この災害を記録せねば」という思いが私の広報マン魂を揺さぶりました。二月一日、菅並に車を置いて単独徒歩で小原・田戸へ向かいました。

そのときの記録が二六～三一頁の写真です。茅葺屋根の多くが傾いたり屋根材が抜けたり地棟が折れたりという惨状でした。この雪の後、萱葺き屋根はトタン張りに修復され村の風景が一変しました。

1981（昭和56）年の豪雪を伝える新聞記事

第三章 祈り

奥丹生谷には、自然災害や病から村と家と身を護り、空や大地や巨樹巨岩に願をかける人びとの素朴な祈りが暮らしの中に息づいていました。

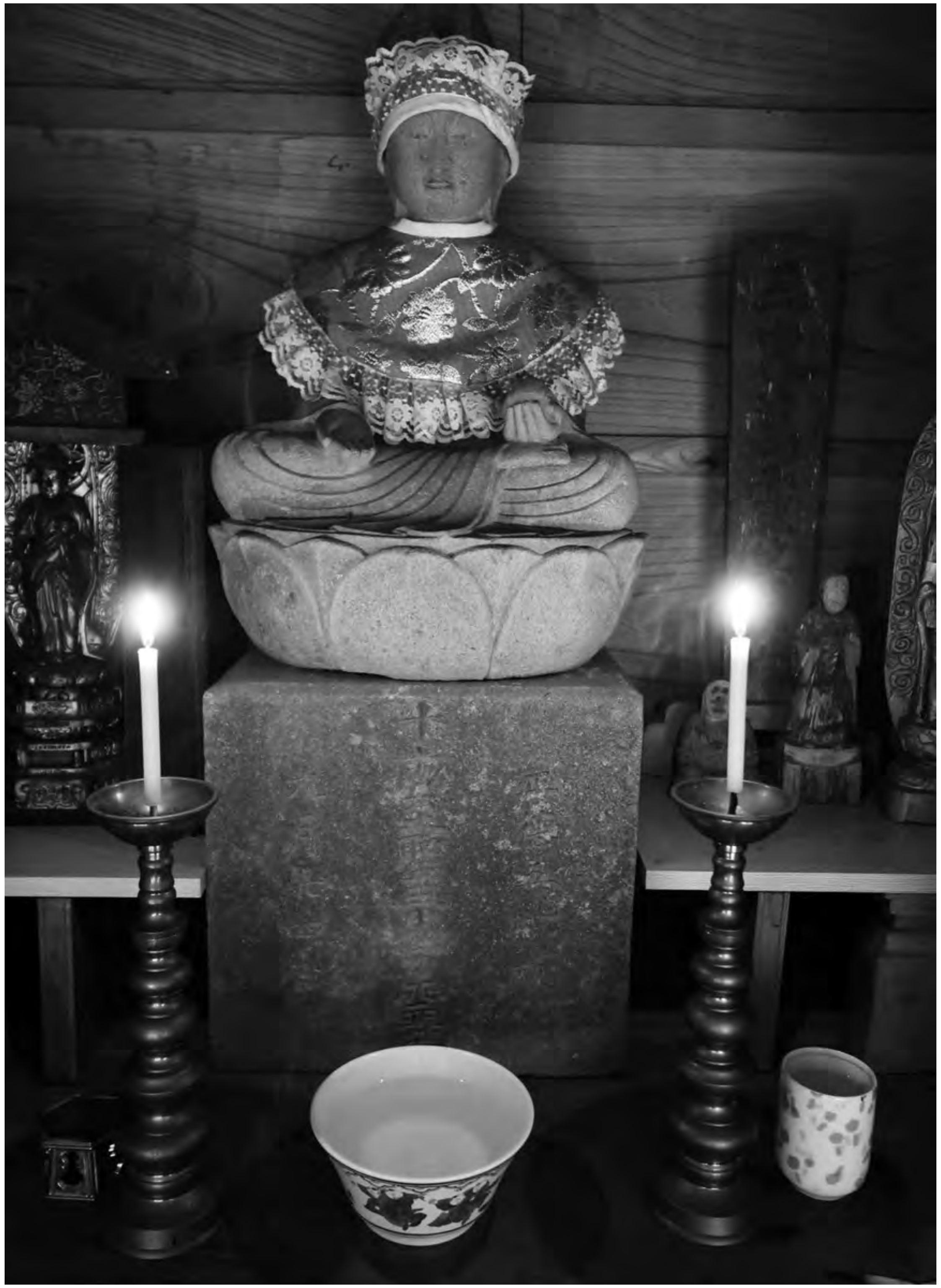
宗教は、小原、田戸は禅宗、鷲見以北は浄土宗で地蔵信仰、観音信仰が盛んでした。お墓は湖北に少ない両墓制。埋め墓と参り墓が別々に設けられ、離村まで土葬が行われてきました。小原では白山信仰南限の地ともいわれ、安蔵岳の山頂にあった小さな観音像が里へ降ろされたあと、家から家へ送っていく「回し観音」が行われてきました。寺も観音堂もない小原では、一カ月ごとに観音さまを預かってお守りし、次の宿の家に村中が集まり観音講と呼ぶ食事会を開いてきました。

野神祭は、村外れの巨樹に神が宿って秋まで常在するとされるのが湖北では一般的ですが、鷲見の野神は鷲穴に大明神を祀り、八月二十八日ごろに素足で高時川の清流を渡って岩穴で神事が執り行われてきました。

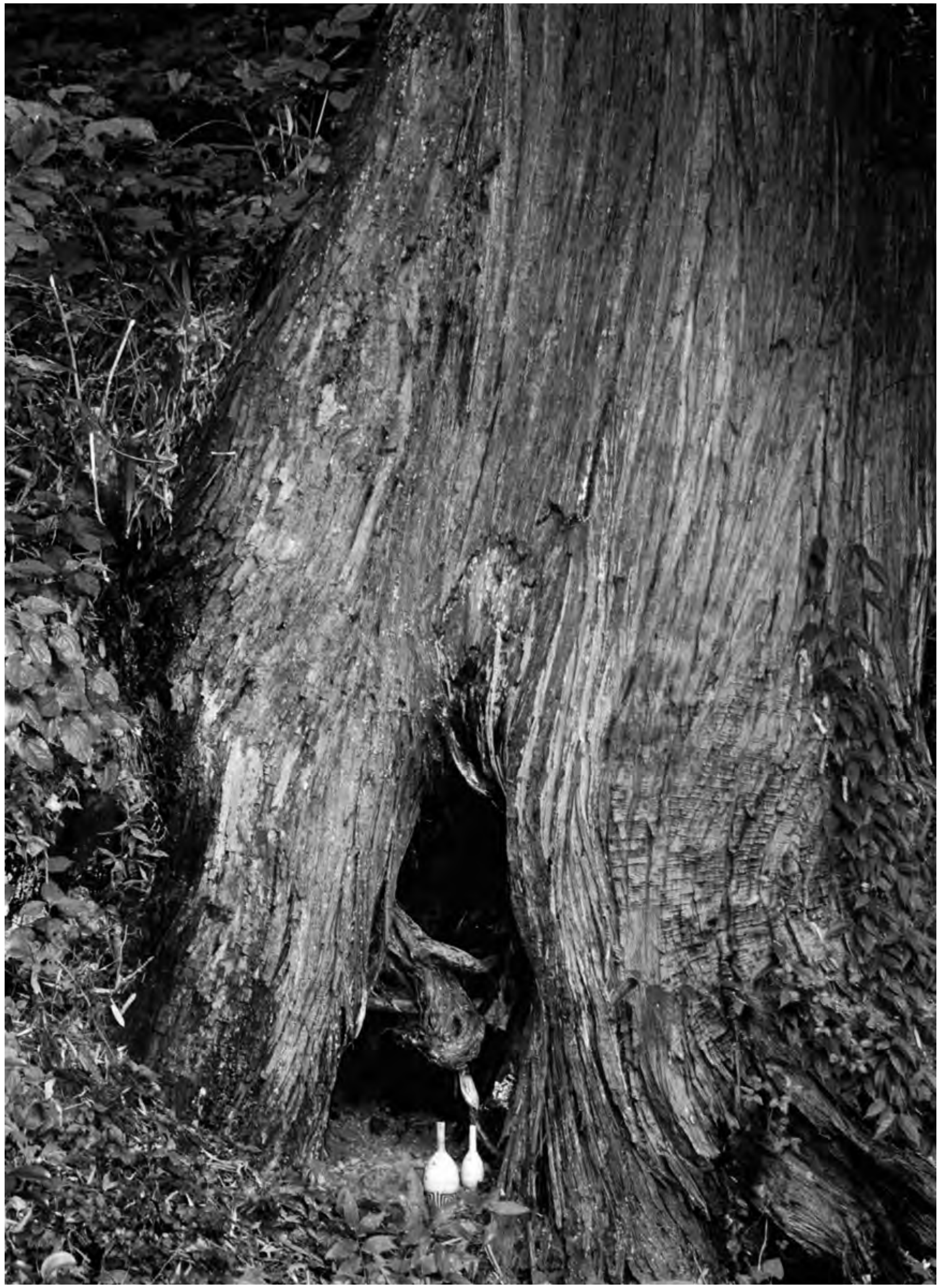
一粒万倍を祈る田戸の初午祭は雪の中でひっそりと行われ、小原の疱瘡（ほうそう）送りは水辺ではなく村の鎮守の杉の巨木の洞に祀られていました。田戸入口の愛宕札は全村焼失という悲惨な火災を二度と出すまいという願いが込められていました。胸を打ったのは、小原の集会所の片隅の手のひらサイズの木像でした。眼病を患った村人が「どうか私に光をください。この目をよく見えるようにしてください」と小刀で刻んだ小さな木仏でした。その人は毎月お参りしては抱きしめて祈り続けたようです。寄木で造られたその顔は半分割れ落ちていて、いっそう哀れを誘いました。

村を開いた人を讃える聖地とされる小原のダンジュク（大将軍）。
村の中央部に謎の石組みが存在した（1988年）

アワ除け地蔵堂にお参りする小原の人たち。かつて禅寺が廃寺になったあとアワ（表層雪崩）に見舞われ村は大きな被害を受けた。地蔵の台石には「正徳５年（1715）」の文字が読める。小原出身の人から「ここにあった寺の住職と村との間に諍いが起き、住職は追われるように寺を出て行った。その後にアワが発生したので住職の遺恨を祓うためにこの地蔵がつくられた」という話を聞いた。（1995年）

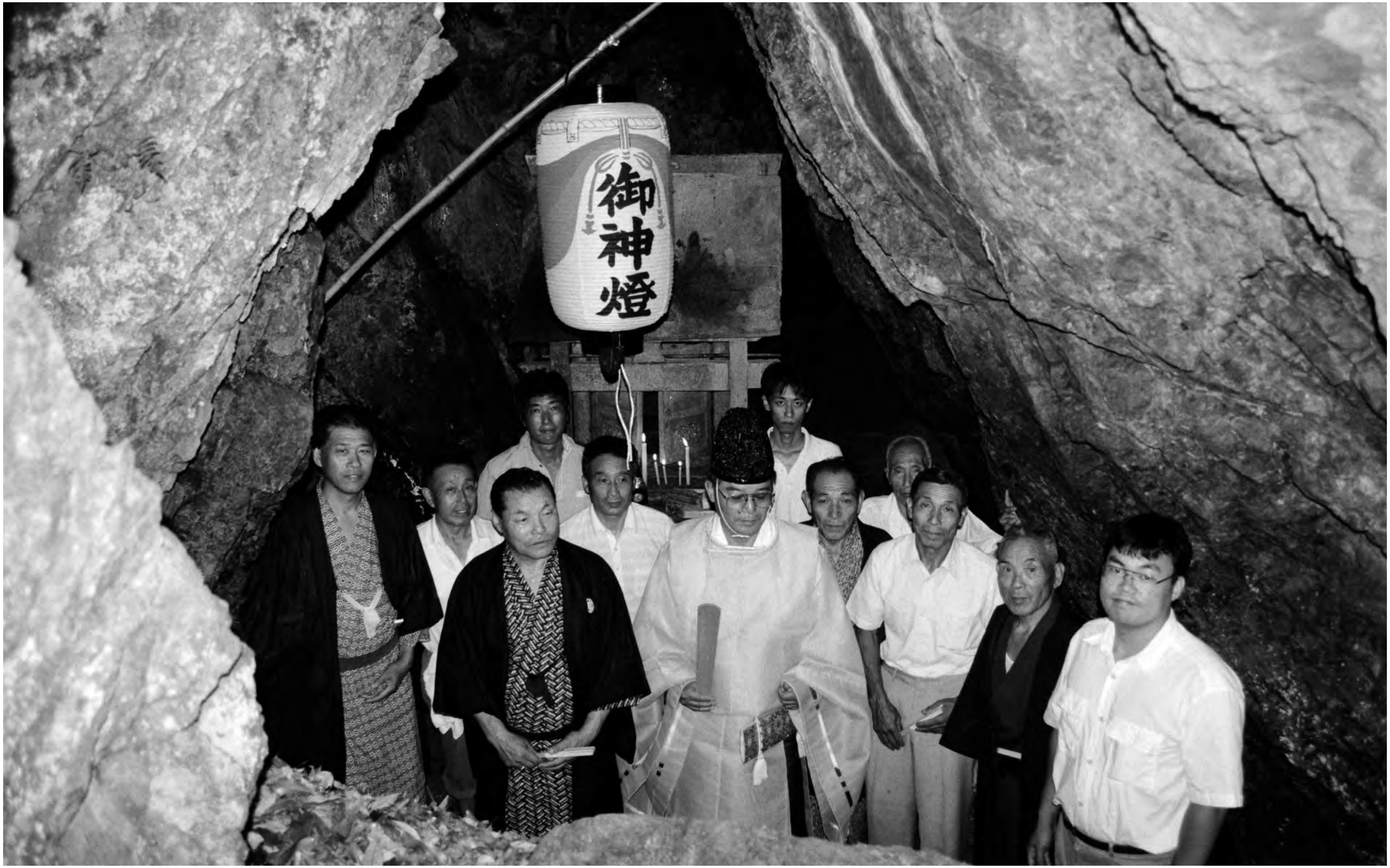


小原のアワ除け地蔵。表層雪崩の被害から逃れられるよう祈り続けられた。
現在は今市に移されている（2021年）



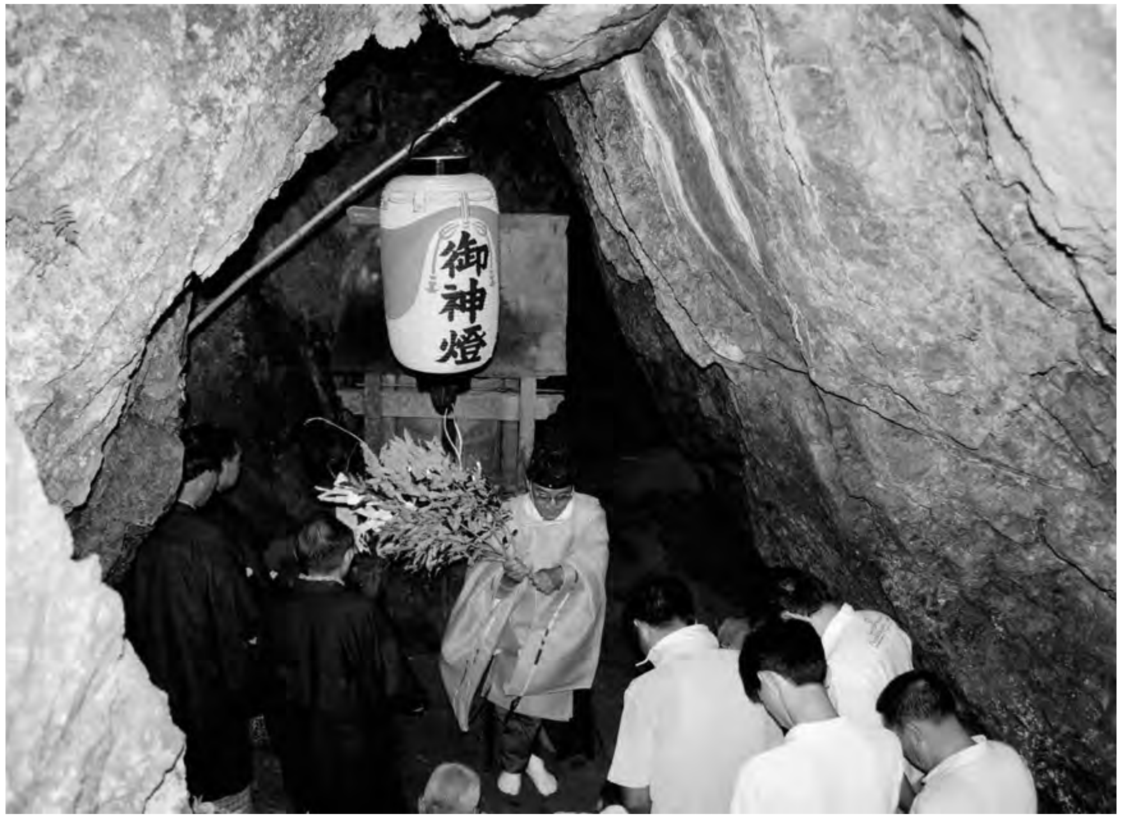
疱瘡（ほうそう）の神。
疱瘡という伝染病に罹ると赤飯の握り飯をつくり大杉の洞に供え快癒を祈った（小原 1980年）

眼病で目が悪くなった人が彫った「視力回復願い仏」。寄木が剥がれた顔の墨跡が痛々しい。
小原から今市に移され、太々野切（ただのつとむ）さんと坂本馨さんの両家が護持する（2021年）



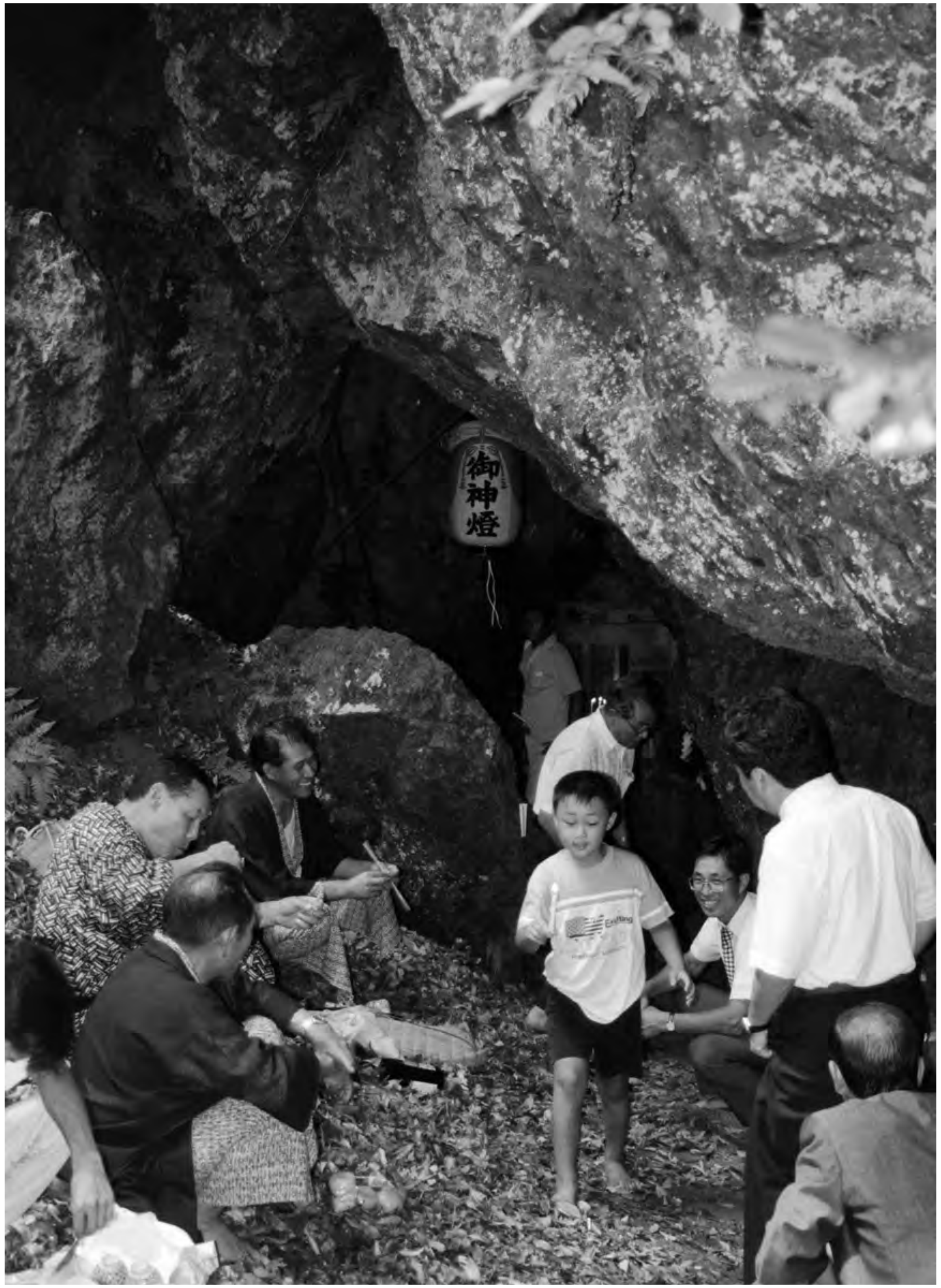
鷲見の野神。高時川の対岸の岩窟にあり鷲見大明神とも呼ばれた。
毎年8月28日ごろ野神祭が行われ村中全員がお参りした。洞穴に入ると不思議な霊力を感じたという（1988年）

野神への川渡り。川底は玉砂利、対岸に渡りやすい美しい清流。
まさにみそぎの渡りだった（1988年）



鷲見大明神でのお祓いをうける。
岩窟は普段近づく人がいないため、コウモリの巣になっていた（1998年）

八幡神社での例祭で祈る谷口長三さん。
山の神の祟（たた）りがないことと家の平安を祈られたのであろう（1988年）



野神祭には子どもも参列する。
子らは五体で行事のようすを覚え、成長して次の代に伝える（1988年）

川渡りのしんがりを務める久保吉郎さん。
世話人は毎年替わるが、大事な祭祀道具である提灯を脇に抱え、背には三宝を背負っている（1988年）

「今日は初午（はつうま）、お稲荷さまにお詣りじゃ」。
春日神社への雪道を登る田戸の老婦（1994年）

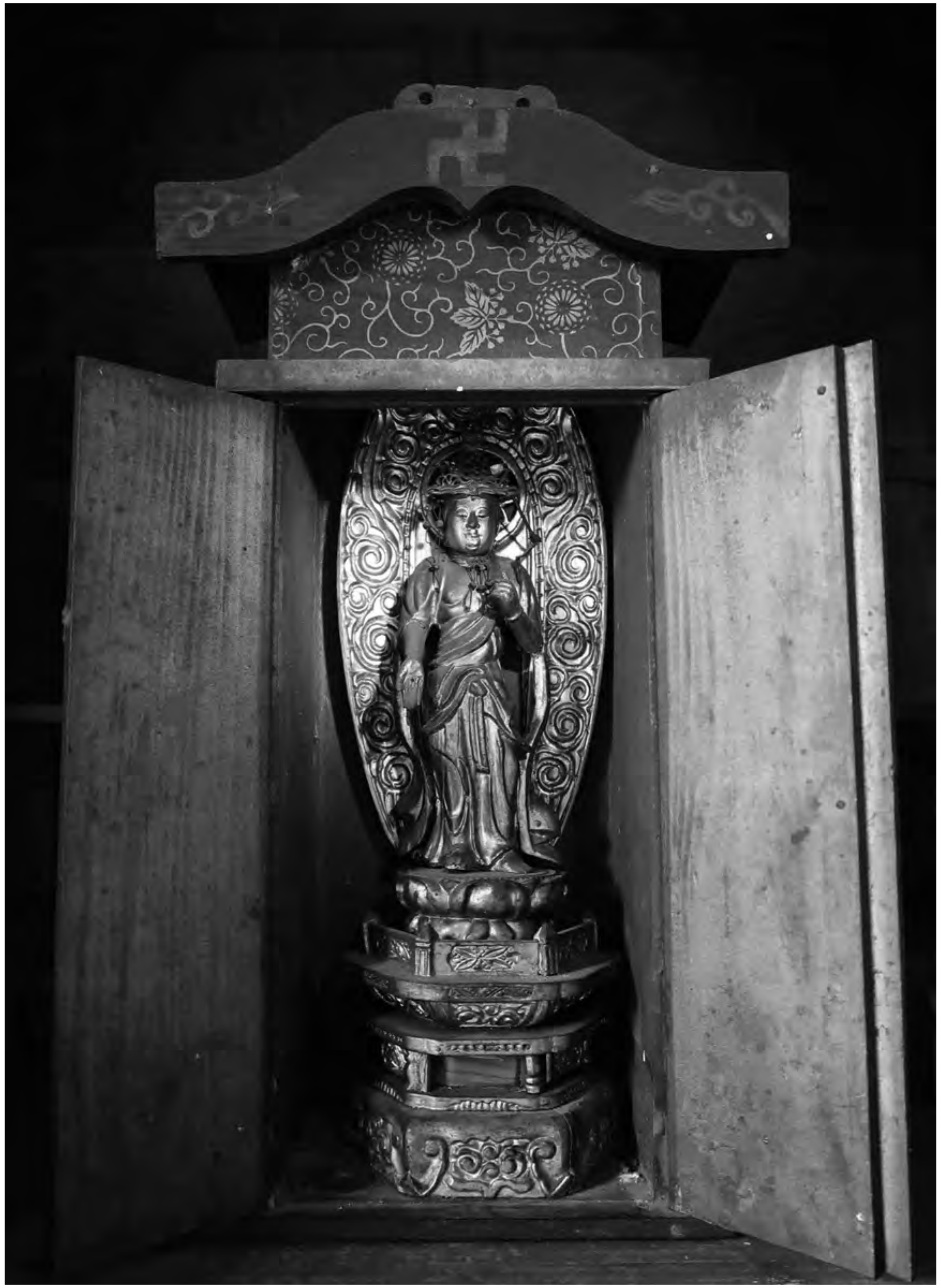
小さな稲荷の祠に祈る村の長老・今井巳一さん。
一粒万倍を祈る行事として伝承されてきた（1994年）

初午のお供えは、おキツネさんの好きな油揚げとイワシと団子。
それを手にする今井静江さん。初午は2月最初の午の日、京都の伏見稲荷神社の神が降りた日がこの日であったといい、全国で稲荷社を祀られるが、山深い田戸でも稲作や養蚕の豊作を願って同様の祭事が行われてきた。神社の本殿には弓打ち式用の弓も残されていた（1994年）

初午の日、春日神社の本殿前で焚火を囲む田戸の人たち。
戸数が減ってこれで村中全員集合だ（1994年）

焚火を囲み雪上での直会。アテは供物のお下がりのアゲとイワシと串団子。
誰かがゴボウ、レンコン、コンニャクの煮物を持ってきた。「茶碗酒が五臓六腑にしみわたる」と今井柳三さん（左）（1994年）

地蔵に祈る今井巳一さん。地蔵には一体一体に深い由緒がある。
田戸の入口の石垣に組み込まれていた石仏の由緒を聞き逃したが、
家の墓地には入れない無縁の霊を村人は弔ったのであろう。自然
災害による犠牲者か、転落等による事故死か、行路病人か、一基
には一人ではない何人もの霊を宿すこともあり、穏やかな山里の
悲しい歴史がここにあった（1985年）



小原の回り観音。安蔵岳山頂にあった厨子高約40センチ
のこの観音を月毎に各家を回し観音講を営んだ（2021年）

鷺見八幡神社の例祭。村のほとんどの家が血縁で結ばれ
ている鷺見の祭りは大家族の寄り合いのよう（1988年）

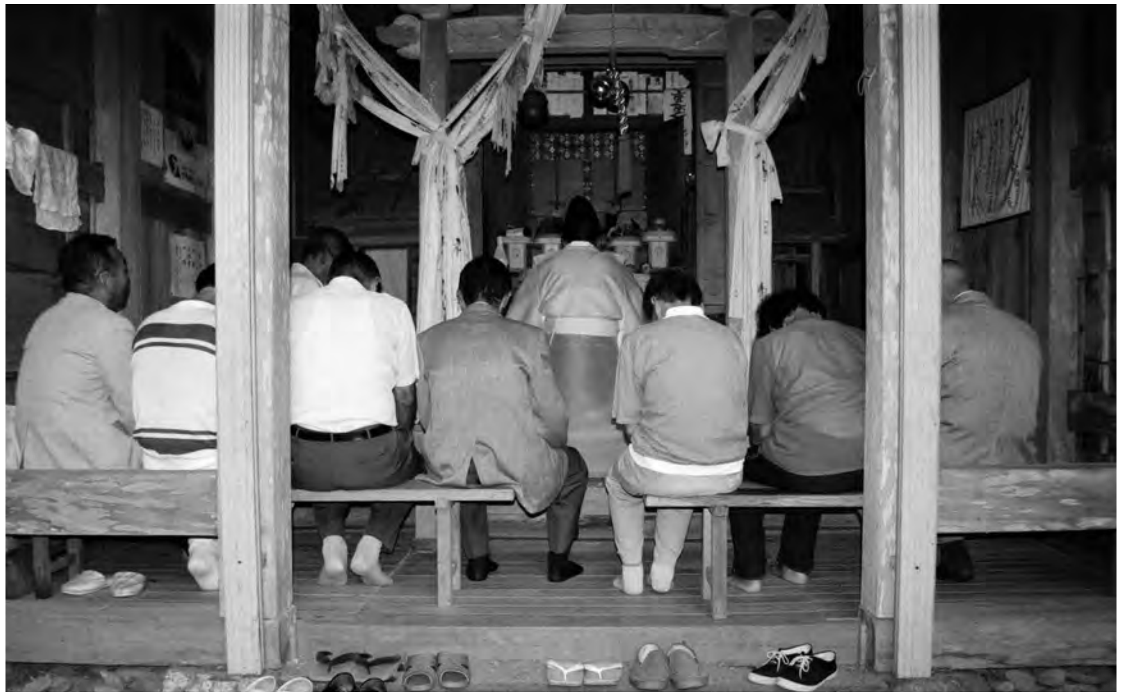
お参りの人への振る舞い酒。「これは川口家からの祝い酒や」。
茶碗を受ける人の表情が緩む（1988年）

神前に祈る。手前のメガネの人・瀬川俊一さんはこの1ヵ月後に
ソバ畑で倒れ還らぬ人に（1988年）

鷲見を護る７人の世話人。
左から木下清、山口勇太郎、久保秀雄、山根宮司、橋詰儀三郎、瀬川俊一、久保吉郎、川口一治のみなさん（1988年）

小原、氏神への道は心地よい坂道。
初秋の陽射しをあびて笑顔がほころぶ。正面の家が山﨑傳さん宅（1994年）

小原春日神社。頭上に舞う榊、その風切る音が村人の心を一つに
繋ぎ村に平安をもたらしてくれる（1994年）



小原。産土神（うぶすな）に参る人びと。
祈りの背に個と集団の原理がうまく組み合わさった村の姿が見える（1994年）

小原。里帰りした人同士が顔を見て「元気か、そうか、よかった」と
言う言葉をかけあっていた（1994年）

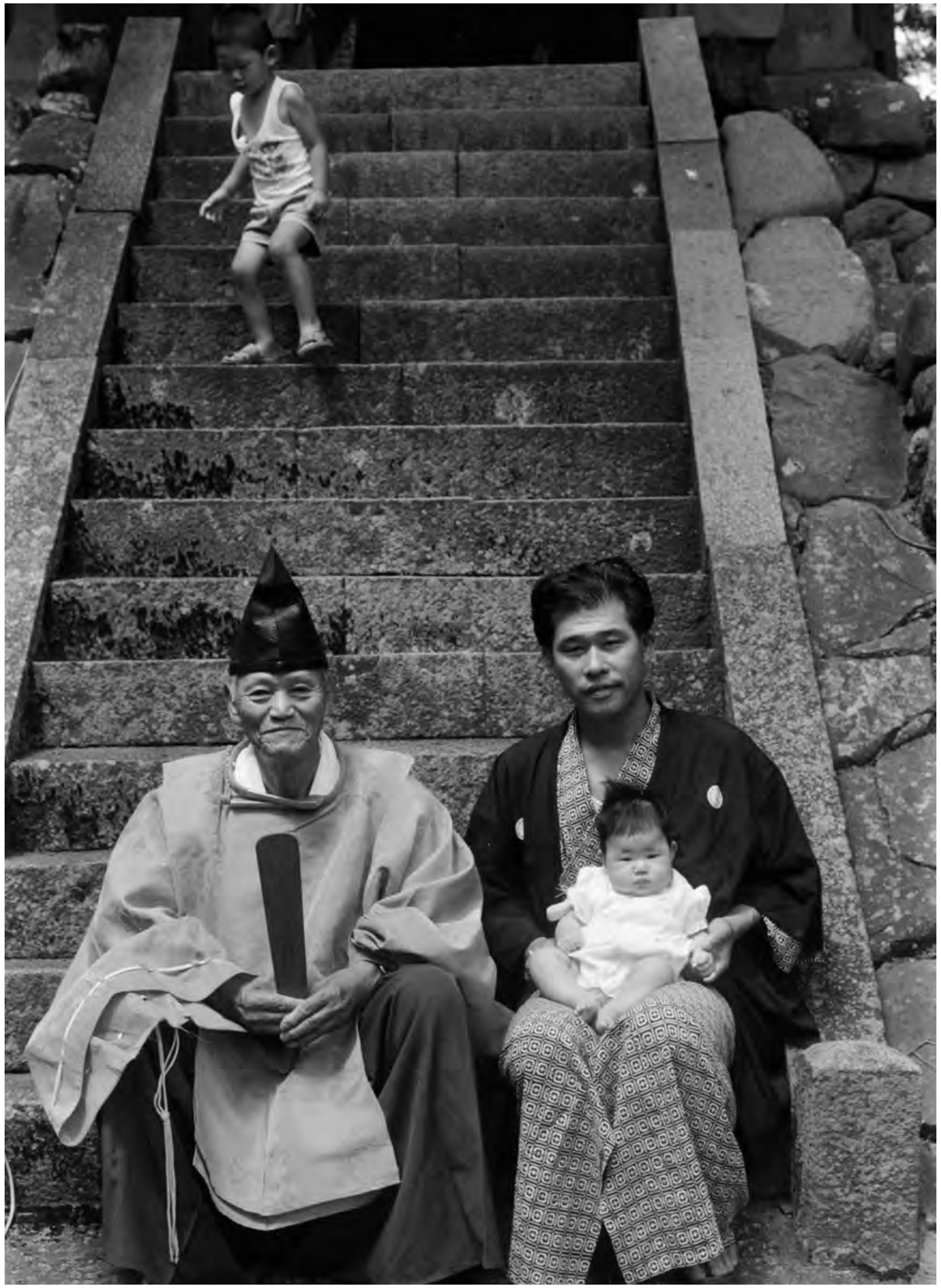
小原、春日神社前。「ふるさとは、境遇も何もが違う者同士が心をある方向に寄せていける内的空間」。
越後・奥三面を記録した映画監督・姫田忠義さんの言葉が思い出された（1994年）

明治28（1895）年大水害時の殉職警官を祀る石地蔵。
同年湖北は大水害に見舞われた。7月28日からの豪雨は木之本で
4日間に504ミリ、8月5日までに711ミリを記録。
8月2日伊香郡丹生村尾羽梨で滋賀県警察本部の森本平次郎警部は
濁流に流され殉職された。警部は水が引いた後南浜のヤナで見つ
かり、村人らによって石地蔵が造られた。いまその石仏は洞寿院
境内に移されている（2021年）

「お地蔵さんも寒かろう」と、村の誰かが発泡スチロールの箱に
お地蔵さんを入れていた。半明の墓地の近く。
人は去っても、今も六地蔵が村を見つめている（2001年）

小原の精霊流し。お盆に迎えたご先祖の御霊を家族で偲びそれを
送る行事。精霊はご先祖だけでない。山川草木に宿る魂をも供養
する神聖な祈りの場とされた。高時川源流だけでなく、安曇川や
愛知川源流域でも行われてきた。精霊崇拝は日本人の精神性の原
点とも言われるが、小原での行事は集団移住で消えた（1995年）

川辺に設けられた精霊棚。
あすはわが身という無常観が漂い思わず厳粛な気持ちになる（1995年）



鷲見、宮参りを終えた川口一治さんとさや香さん（昭和63年生まれ）。
石段の子は兄の亮人くん（1988年）

鷲見、川口さや香さんの宮参り。山根宮司に祝詞をあげてもらう。「健康で明るい子に育ってほしい」と父一治さんは願ったことだろう。産土神へのお参りは「村の一員にならせてもらいます」というご挨拶の場でもあった。村を離れて家を構えている人が宮参りに氏神に詣でることはほとんどない。血縁で繋がりあっている鷲見の村にとって赤ちゃん誕生は嬉しい出来事だった（1988年）

鷲見、瀬川俊一さんの埋め墓。瀬川さんは大正10年生まれ。
自治会長として、草刈り等の先頭に立たれていた１カ月後の姿だった（1988年）

鷲見の埋め墓。等身大の石地蔵が墓と村（写真右下）を見守る。
石地蔵の向こうに六地蔵の祠があり、その奥の杉木立のところに浄土宗・西念寺と参り墓があった。鷲見の村はこの地蔵さんとご先祖に見守られているような雰囲気があった。写真左手斜面には焼畑が行われた跡が見えた（1988年）

豊作を願う祈祷札。
六所神社のお札を田んぼの水口に立て病虫害から逃れられることを祈った（1988年）

明治27（1894）年。全村消失（14戸のうち13戸全焼）の大火
に見舞われた田戸は、以後、火伏せの神・愛宕大神に祈り続けた。
毎年村の代表が京都の愛宕神社にお詣りして祈祷札を受け、各家
に配ったあと村の入口にも掲げた（1994年）

第四章 暮らし

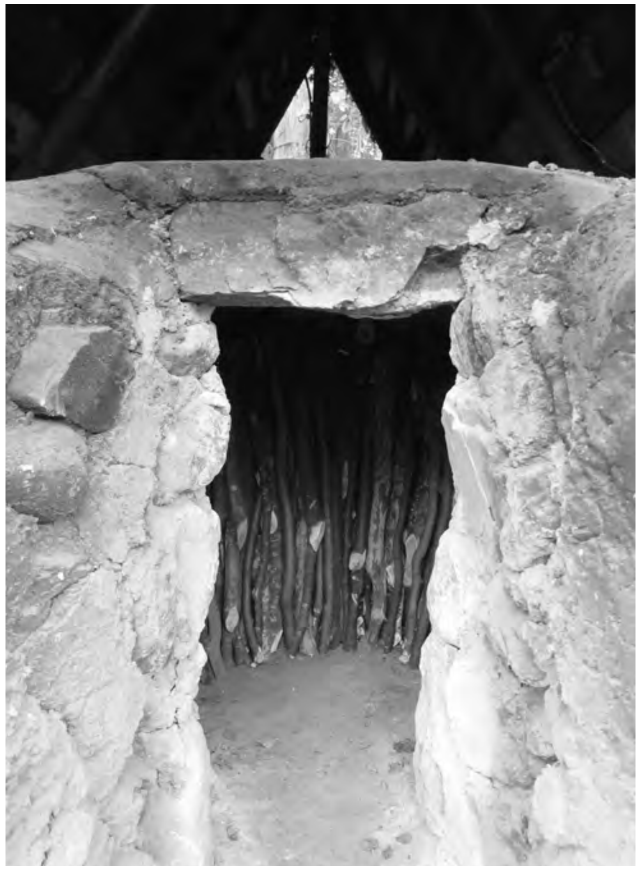
高時川源流の七ヵ村は猫の額のような水田しかなかったため暮らしは炭焼きに依存してきました。炭を焼いて組合に出荷しておけば、米・塩・砂糖・味噌・醤油などは口座引き落としで手に入るため現金を持たなくても生活ができました。炭焼きは夫婦で営んできましたが、炭焼き窯を造るときなどは何人もの応援を得なければなりません。水田作業も同様で、「ユイ」と呼ばれる手伝いあいと血縁による助け合いで暮らしは成り立ってきたのです。

伐採、炭焼き、焼畑などの山仕事と豪雪の中での行動は危険と隣り合わせでした。そこから身を守り家を繁栄させるために、人びとは大自然と祖先に祈り続けます。たくさんの神々を信じ、月の満ち欠けによる人の生死や気候変動など自然の摂理を受け止めてきました。

米は自家用米の三分の一ほどしか自給できず、焼畑でのソバ、アワ、ヒエ、キビなどで補給しなければなりません。山からはトチ、バイ、クリや山菜などが豊富に得られました。その限りある資源の恩恵を平等に得るために「クチ」と呼ばれる解禁日を設け、抜け駆けと乱獲を戒め合いました。山の猟でクマ、イノシシ、シカ、ウサギ、タヌキや、キジ、ヤマドリ、ツグミなどを、川からはアユ、マス、イワナなどの蛋白源を得てきました。まさに山に生かされた暮らしがあったのです。保存食の工夫は多様なものがありました。赤カブラや沢アザミの漬物などは山里でしか味わえない絶妙の味でした。一千種類以上ある山野草の八割は漢方薬になると言われ、村の人たちは高いレベルの薬学の知恵も持っていました。

奥丹生谷七ヵ村の生計の柱だった木炭。
四角い俵は１級品、丸い俵は２級品とされた。鷲見（1980年）

谷へ集められる炭焼き用の原木（一九八〇年）



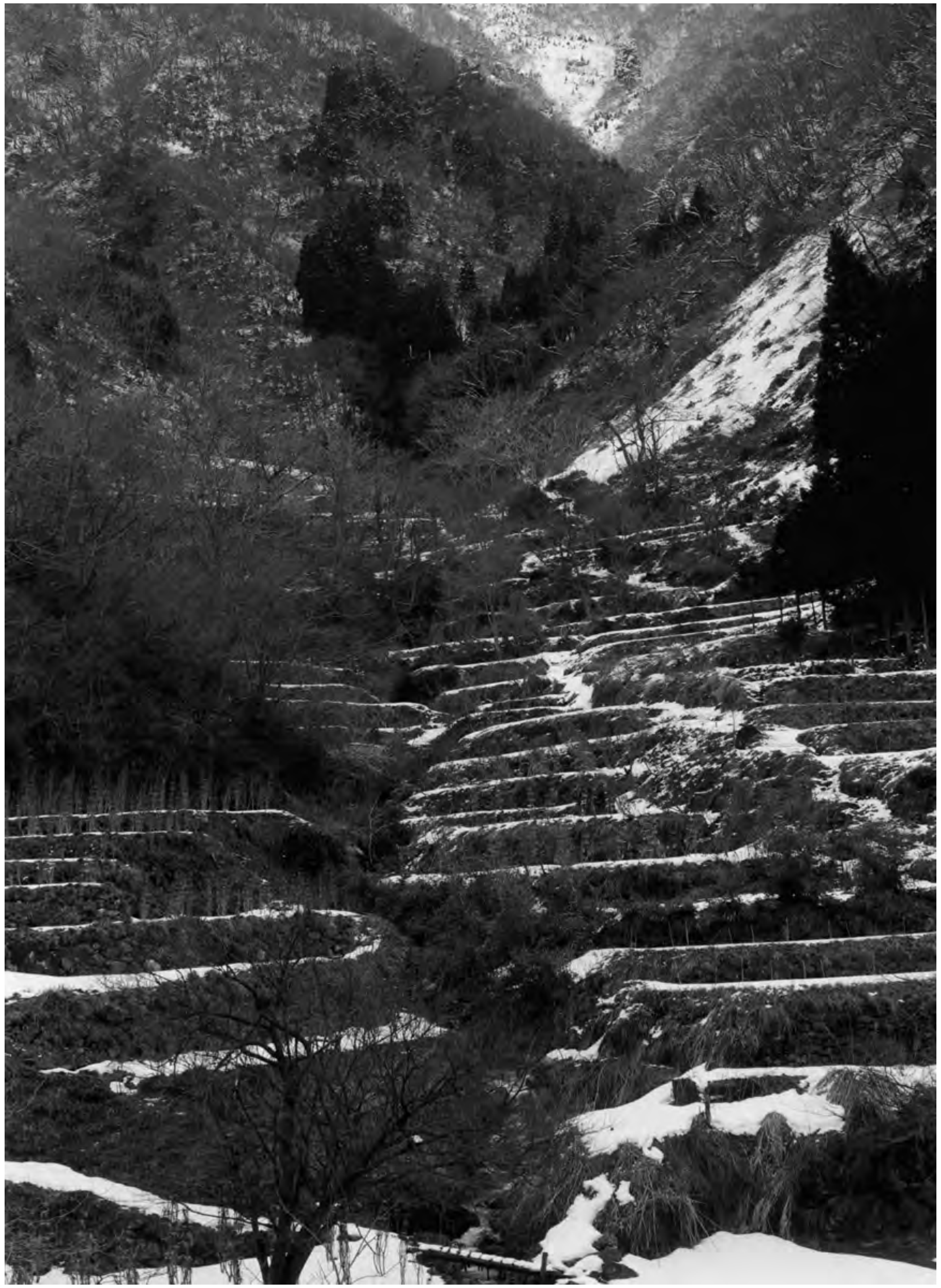
窯に原木を詰め込む。１窯で80〜100俵。火入れから窯出しまで約10日、年に10回、1000俵近く焼く人もいた。用材のほとんどがナラ。奥川並ではツバキ等の材で固く金属音がし長時間火持ちがする「黒木」と呼ばれる最高級の炭が産出された。上丹生で(2021年)

煙を上げる炭焼き窯。煙の色で窯の中の温度を判定し火を止める時間を見極めた。タイミングがずれると原木は灰になってしまう。炭は窯から出して俵に詰め、4〜5俵を背負い、何時間もかけて林道ちかくまで運び出した。原木が尽きると３〜４年で別の場所に新しい窯を築いた。半明で（1980年）

焼畑。上の写真は平地だが、焼畑の多くは山の斜面のハダレと呼ばれる共有地で行われた。赤カブラ、ソバ、アワ、小豆などが栽培され、４年目にはその場所から別の場所が開墾された。谷口長三さん一家。鷲見（1994年）

赤カブラを手にする山口勇太郎さん（鷲見）。大根とともに、どっさり漬け込む（1994年）

ソバの実。黒く尖った実は石臼で挽いて粉にした
転作田を活用した鷲見・久保吉郎さんのソバ畑。
ソバの花は白い絨毯のようだった（1981年）



田戸、安蔵岳の棚田。１年中谷水が切れることはなく、
干ばつの年ほど、この谷は豊作だったという（1980年）

小原橋直下の黒土（くろぶく）の水田。
機械で田植えしたあと補植する山﨑傳さん一家。
下の田は休耕田（1991年）

サル除けのタイヤを燃やす小原の山﨑傳さん。谷間にたなびくゴムが焼ける臭いをサルは嫌って
近づかなかった。完熟前の稲穂を狙うサルを村の人は「ヤマノヒト」と呼んでいた（1991年）

田戸、奥川並林道沿いに設けられた稲架。田戸の水田は集落周辺のみだった。安蔵岳山麓に点在するため春は雪崩による落石を取り除き、洪水で稲が倒伏したときは複数の稲株を括って育てた。秋は時雨しぐれが多いため、刈り取った稲は稲架掛けした。「照り降り十日」収穫の十日目が脱穀の目安とされた（1991年）

稲刈りと稲架掛け作業を終えてくつろぐ小原の山﨑傳さん夫妻と手伝いの今井静江さん（右の人）（1991年）

バイの収穫をする小原の山﨑富子さん。ドングリのような形で、てんぷら油も搾られた高栄養果実。子どもがカゼひいたら「バイの実２粒食べさせよ」と言われたほど。バイの木は山肌を這うように下へ伸びた。9月15〜25日が収穫の適期。アクの抜き方に先人のチエがあった（1991年）

トチの実とバイ（2021年）

トチ。春、巫女の鈴のような大きな花をつける。その蜜は珍重され、実は9月15日ごろ落果する。それを拾うのに「トチノクチ」という解禁日が決められていた。拾ったら数日水に浸して虫を除き、天日乾燥させて取り込み、冬仕事に固い皮を剥き木灰をまぶしてアクを抜いて食した。主食をおぎなった高澱粉質食品だった（2020年）

コラム

クマ撃ち名人

久保吉郎さん

鷲見の久保吉郎さん（一九三一年生まれ、故人）は一冬にツキノワグマを十一頭も射止めたことがある熊撃ち名人でした。離村前年の一九九四年二月十三日、私は弁当を持参し久保さん宅で一日中クマ撃ちの話を訊きました。久保さん六十三歳のときでした。以下は久保さんの話をまとめたものです。

「炭焼きができなくなる冬は犬と山に入った。行動範囲は自宅から半径二キロほどの狭い区域。マタギでないので遠くまでは行かん。雪が降るまでに冬眠しそうな穴を三百ヵ所ほど見つけておく。

猟期は十一月十五日から二月十五日まで。雪が固まって歩きやすくなってから行動する。冬眠穴は木穴と岩穴があるが、九割方は木穴。深い雪の下でも犬が臭いで嗅ぎつけてくれた。雪を掘って穴の中のクマを見つける。丸くなって冬眠しているので近づいても動かない。棒で突っつき倒してやっと顔を上げる。しかし穴の中で撃っても引き出せない。さらに突いて穴から半分身を乗り出したところを一メートルほどの至近距離から狙う。四十貫（百五十キロ）を超す大物は翌日何人かに運び出しを手伝ってもらった。カネになるのは肉よりクマの胆。節分のころに子を産むがこのころの胆が一番大きく万病の薬として値が高かった。家に持ち帰ってから捌いた。皮は捨てたが肉は脂が分厚いのでうまかった。肉はウッディパルが高く買ってくれた。胆は囲炉裏の上で乾燥させた。三十グラムほどの胆に四十万円以上の値がついた。ウサギは一冬で六十匹獲ったことがあるが、近年はキツネやテンが増えたのでウサギは減ってしまった」

左写真は久保吉郎さん（右）と瀬川俊一さん。
下写真は獲れたクマ。近所の人も駆けつける（久保秀行さん提供）

尾羽梨分校最後の先生の回顧談

余呉町立丹生小学校尾羽梨分校最後の先生・柴田郁造さん（一九四六年生まれ＝長浜市室町）は「冬季分校の寄宿舎でのお別れ会はクマ肉のすき焼きでした。久保吉郎さんに、来年クマが獲れたら毛皮がほしいと頼んでおいたら、ナマの皮を肥料袋で届けてくださった。剥製にしてぼくの宝にしています」とクマ撃ち名人を懐かしんでおられました。

雲定め

旧暦の十月二十日、新暦では十一月末、雲の動きで大雪になるかどうかを占う「雲定め」という習慣が鷲見周辺に根付いていました。北西の風が吹き南東に雲が湧くとその年は大雪になるというのです。それは明治時代の天文学・太陰暦の知死期と呼ばれる気象学で雪だけでなく風水害も人の生死もすべて月の引力よるものだとされてきました。

久保吉郎さんは、一、二、九、十は九、六、六。三、四、五は五、五、八、八。六、七、八は七、七の四、四。と呪文のように唱えられました。それが太陰暦の知死期の法則でした。この法則によって、アワ、雪崩などの気象異変が予知され、この時期には動くな、この時間にはどの谷で雪崩が起ると予想され、山の暮らしの行動指針とされました。その知恵によって雪山へ猟に入る久保さんは身の安全を確保してきたのです。

雲定めする久保吉郎さん（1994年 鷲見）

囲炉裏端。囲炉裏は煮炊きや食事の場であり、いつも釜かヤカンには湯が沸いていた。家族が座る場所は決められていたが、そこは客間ともなり、火を囲んで笑顔が絶えなかった。子どもが小さいうちは勉強を教える場になり、女性の裁縫の場ともなった。写真は田戸の今井巳一さん宅。近所の今井柳三さん、髙橋久雄さん、今井静江さんが来て楽しげに語りあっていた。お酒も出されていた（1994年）

小原では、800年ほど前からイタヤカエデの木を薄く剥いで籠やさまざまな容器がつくられた。竹籠より丈夫でうまく使えば100年以上使用に耐えると言われ、奥川並や近郷の村でも作られてきた。下の写真は藁ぞうり。一人年間100足必要で、5人家族なら500足が冬仕事でつくられた（1984年）

漬物。厳しい冬を乗り切るために大きな桶にいくつも漬けられた。白菜、大根、カブラだけでない。山菜もいろいろ漬ける。田の肥料のニシン搾りかすの身の付いている部分を選り出して大根、人参とつけた鰊の麹漬けは山里の食文化だった。味噌は寒い時期に大量につくった。大釜で茹でた大豆と麹と塩をまぶして熟成させた。山里の保存食には「発酵」をうまく生かす技があった。豆腐もコンニャクも自家製造（鷲見で1979年）

藁の雪靴。カンジキをつけて雪道を行くとき歩きやすかった。
ゴム長靴登場後も愛用された。田戸、高橋久雄宅前。
藁履は、久雄さんの母きりゑさんが作った（1994年）

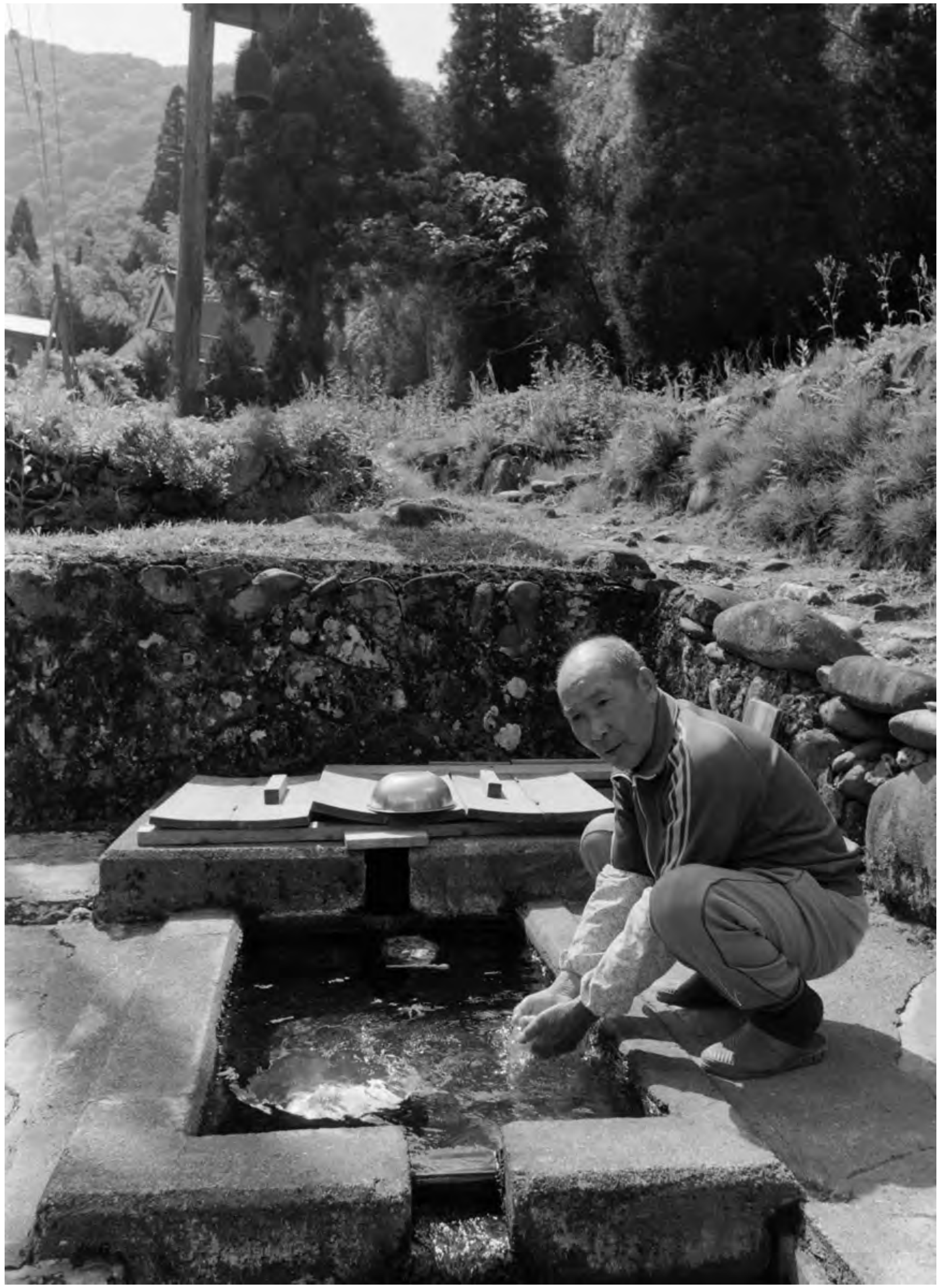
小原。山﨑左馬太さん宅前の石段は応接間のようだった。
山﨑左馬太さんと妻 八重さん（立つ２人）と尾﨑和彦さん（左）と２人の子、
妹の彩さんと姉の由里さんと坂本多鶴子さん（中央）（1994年）

田戸、髙橋久雄さん宅。
集会所上の山の木の伐採が始まり、索道（ワイヤー）で材木をおろした。
談笑している4人の左が髙橋久雄さん、右端が今井巳一さん。
奥の家は今井柳三宅。右奥が春日神社（1994年）

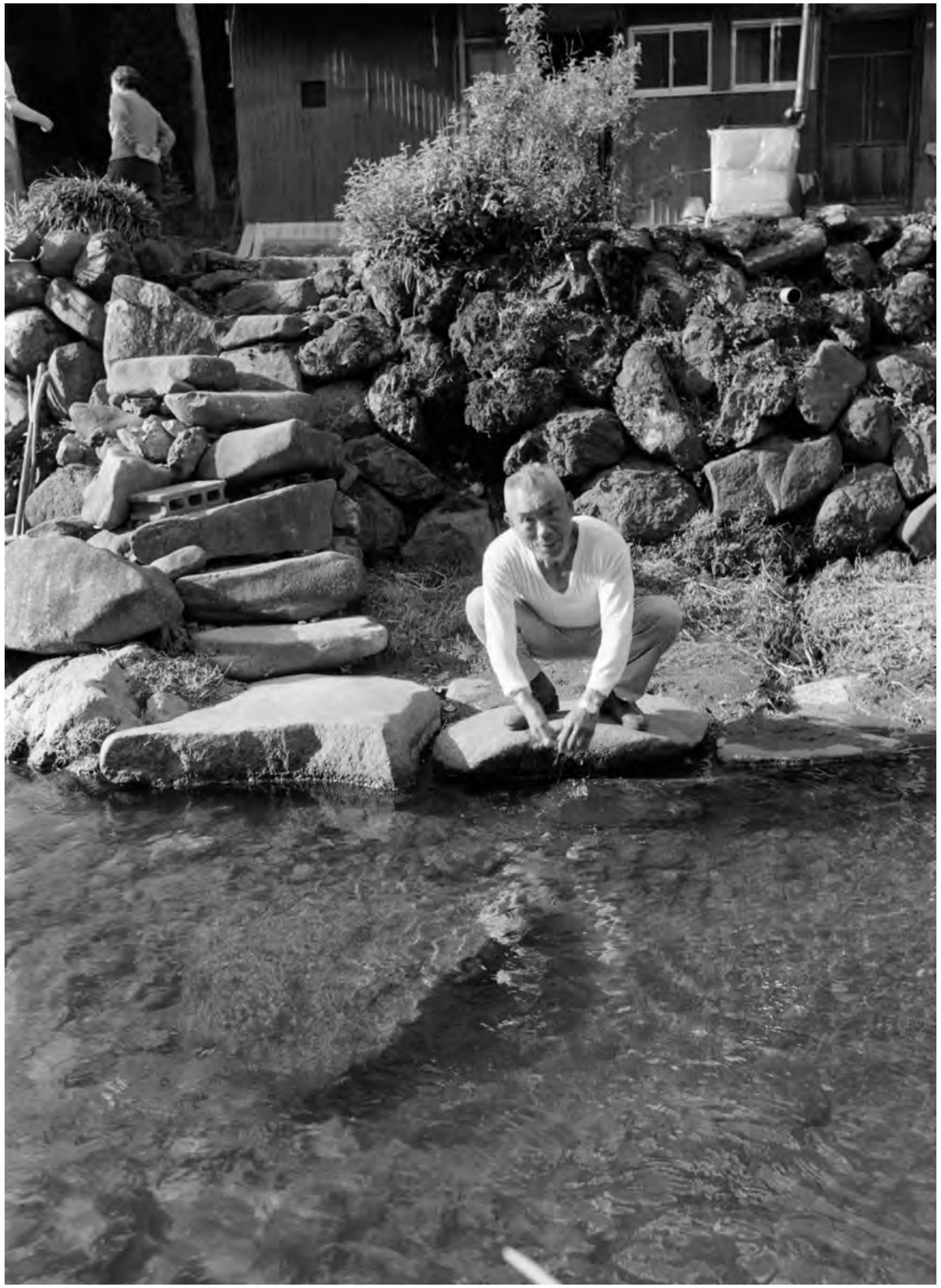
1975（昭和50）年の鷲見。ほとんどの家が萱葺きだった。
老婦はどこへ行かれるのか。写真左は割木小屋。
囲炉裏とカマドと風呂焚き用に一冬に大量の割り木や柴が必要だった

鷲見の山口勇太郎さん宅。
石垣の上の高台で村が見通せる位置にあった。
トントントンと鷲見川へ下りればそこは山口家専用の洗い場。
対岸に渡る橋も山口家が設置していた（1979年）

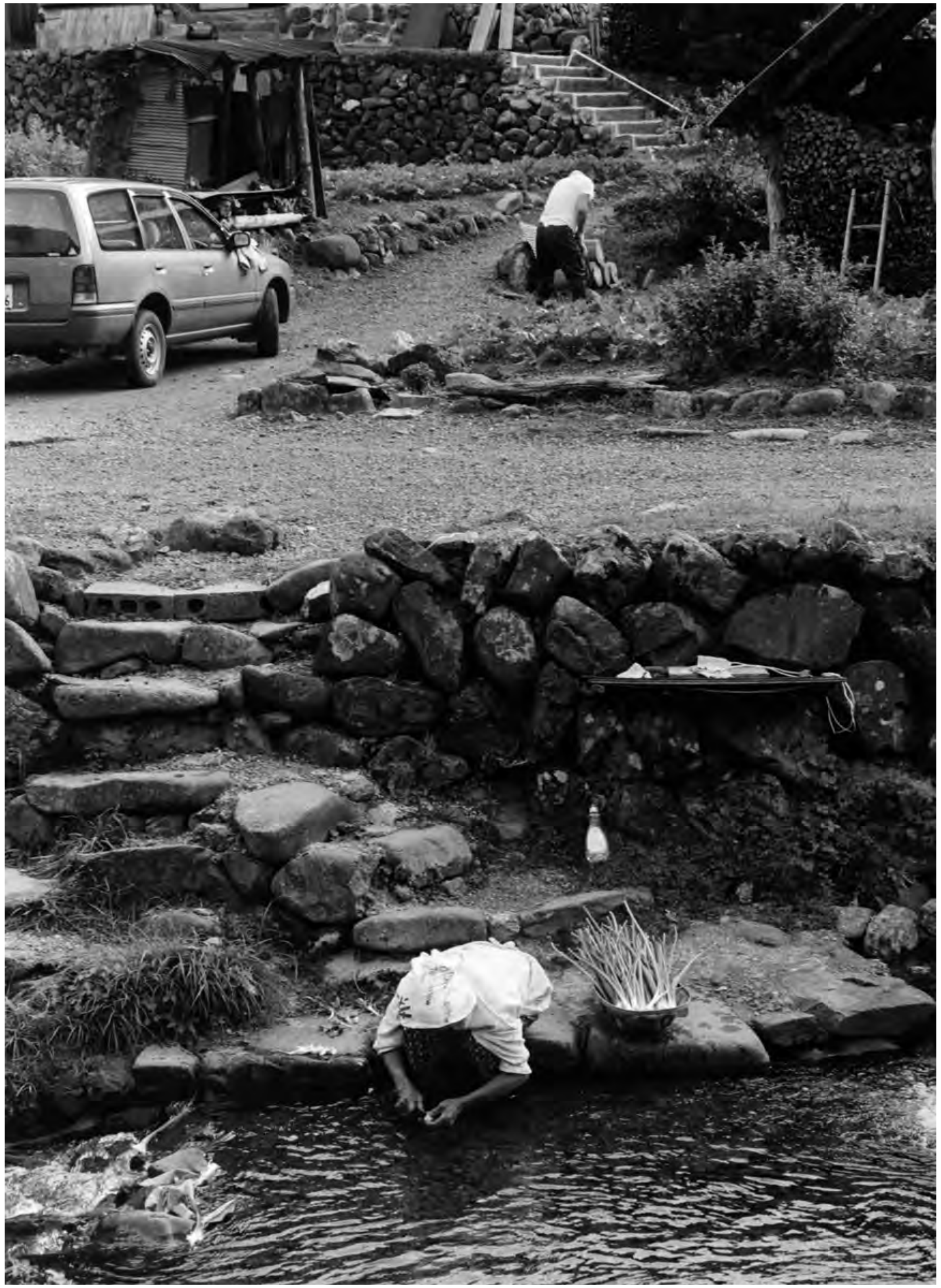
小原のショウズ（共同井戸）。
集落が谷あいのような所にあるため年中清冽な水が湧き出していた。野菜や食器の洗い場や冷蔵庫代わりにもされた。主婦にとっては何より楽しいおしゃべりの場だった。井戸の上手に半鐘楼があり、氏神・春日神社への道は井戸端を通らなければならず、この井戸を中心に村が開けた。昭和30年代に水道が引かれた後も井戸は使い続けられた。井戸は今も残る（1994年）



小原のショウズは村の暮らしを支える命の水だった。
手で水を飲む山﨑左馬太さん。風呂水もここから運んだ（1994年）



自宅前の鷺見川で顔を洗う谷口長三さん。
私はこの水で冷やした素麵をご馳走になった（1995年）



鷺見川で里芋を洗う山口はるのさん。
奥の後ろ姿は自宅前で薪を割る夫の山口勇太郎さん（1995年）

「火の用心」、真昼の夜回りをする田戸の今井巳一さん。過去に火災で全てを失った悲しい出来事を人びとは幼い時から聞いている。ひとたび火災が発生すると、谷あいには火の竜巻が起き、あっという間に猛火に包まれる怖さをみんなが知っている。全村焼失という災禍から立ち上がってきた田戸の人たちの共有林活用などの結束力は凄いとしか言いようがない（1994年）

火災や災害を知らせる半鐘の打鐘板。奥丹生谷は過去に何度も火災に遭っている。記録によると1877（明治10）年奥川並3戸4棟全焼、1878（同11）年奥川並5戸6棟、1888（同21）年尾羽梨6戸8棟、1894（同27）年田戸13戸19棟、1911（同44）年小原2戸、1957（昭和32）年半明9戸15棟全焼とある。昼間は皆が山仕事。危急告知の早鐘を聞いて人びとは山から駆け下りてきた（1980年）

第五章

分校

奥丹生谷には三つの分校が置かれました。余呉町立丹生小学校小原分校、奥川並分校、尾羽梨分校で、一～四年生は、針川・鷲見は尾羽梨へ、田戸・小原は小原へ、奥川並は奥川並へ通いました。奥川並と小原間は五キロ以上も距離があり、五～六年生は夏場は小原分校へ自転車通学でしたが、冬は奥川並・針川・尾羽梨・鷲見・田戸の五～六年と中学生は小原分校で寄宿生活をしてきました。半明は中河内小学校へ。鷲見にも冬期臨時分校がつくられました。小学生の寄宿生活が人間を鍛えてきたとも言われます。

奥川並分校と尾羽梨分校は離村とともに閉校になりましたが、離村までは先生一人、児童一人の複々々式学級の状態が続き、先生は一人で全教科を教えました。

平成七年小原分校も閉校になりました。

尾羽梨分校（左）と鷲見冬季分校の子どもたち
（尾羽梨分校最後の先生、柴田郁造さん提供）

1969（昭和44）年11月、奥川並の集団移住とともに奥川並分校も閉鎖された。最後の3年間は先生１人、児童１人の状態が続き、黒板には「さようなら、またのあう日まで 奥川並分校」と書かれていた。黒板の小さな字は「本を読みました。絵も書きました。けんかもしました。でもこの分校の先生と仲間たちが大好きでした。人影もなく、学ぶ児童がいなくても、奥川並分校は生きています･･･」とあり、黒板は建物が朽ちるまで存在した。この分校は多くの人物、人材を輩出している。大自然の中で子どもたちは耐える力、生きる力を身につけたのだろう。（1980年）

倒壊寸前の奥川並分校校舎。
閉校から10年も経つと校舎は荒れ果てた。最盛期76戸あった村は木炭不振で離村時17戸になっていた。分校は集落の川を隔てた対岸にあり、丸太橋でつながっていた。閉校後児童は、1970年３月までは小原分校で寄宿生活をし、４月から余呉、今市の片岡小学校へ通った（1980年）

1975（昭和50）年の尾羽梨分校。離村から４年目。
家はなくなり分校の建物だけが残っていた。
ブランコの子は私の長男（昭和44年生まれ）

丹生小学校小原分校。
田戸と小原の全学年と、針川・尾羽梨・鷲見・奥川並の5〜6年生が通学し、子どもたちは３ヵ月は親の許を離れてこの分校で寄宿生活を送った。小学生が掃除も洗濯も自分たちでやり、放課後も薪ストーブを囲んで自主勉強に励んだ。1階は玄関ホール、体育館、ステージつきの家庭科室、台所、風呂トイレ。2階が教室で、教室は1〜4年と5〜6年に分かれ、家庭科室が子らの宿舎となった。ストーブが燃えるホールが自習室とされ、教員宿舎は別棟だった（1996年）

子どもたちが彫った記念塔。
冬は積雪の目安ともされた。先生だった小柳文之進さん（1943年生まれ＝故人）は文集に「防雪板が一面に貼られた暗い教室で、あたたかい千切大根のお味噌汁をいただくときは誰もが笑顔で、一日のうちで一番心の休まるときでした。幼い子どもにとって両親と３ヵ月も離れて冬を乗り切ることはつらいことだったでしょう。でも、誰一人として父母に会いたい、と口にする子はいませんでした」と記している（1996年）

雪の小原分校。冬季は5〜6年生だけでなく、中学生も寄宿してここで学び、中学生が5〜6年生の生活指導をするようになっていた。
児童生徒数が多いときは田戸の民家が寄宿を受け入れた（1980年）

第六章

遷座（神を移す）

神様を移す「遷座」という祭事は日本人の精神性の象徴的な儀式で、深夜に厳かに行われました。伊勢神宮遷座の地方版です。鷲見では昼に町長や水資源公団関係者などを招いて離村式が行われ、夜、村中参加の会食会のあと行列をなしての神移し式でした。遷座先は、鷲見の八幡神社は余呉町東野の八幡神社へ、小原と田戸の春日神社は今市の佐味神社に、半明の愛宕神社は中河内の広峯神社に合祀されました。離村式、遷座祭は家の当主は正装です。夜の会食は最後の晩餐となり、社務所に入れない人は境内に筵を敷いて円座をつくりました。大声を出す人はなく、宴は粛々と行われました。神の収まった長持を村人は見送り、遷座先の東野、今市の人たちは最敬礼するように迎えました。子孫が新しい村で、神の下に仲良くやっていけますようにと、移転先の神社の社殿や社務所の整備に鷲見・小原・田戸区は巨額の寄進をされています。

神移しにも、氏神の遷座と野神の遷座があり、鷲見の野神は岩窟の鷲見大明神でご神体は石でした。岩穴での神事の後、高時川の清流を若い人に背負われて渡り、移住先の東野に新築された西念寺境内の新設お堂に移されました。鷲見の岩窟には人が近づくことがなくなったため、いまコウモリが増え続けていることでしょう。

鷲見、離村式の日、八幡神社の境内で。
村を離れている人も帰ってきての遷座準備の昼飯（1995年10月22日）

鷲見、八幡神社の老杉も伐られ、
56項の鬱蒼(うっそう)とした鎮守の杜が寂しい姿になってしまった
（1995年10月22日）

離村式に臨む。右の黒衣の人は氏子代表山口勇太郎さん。
これから別れの式典が始まる（1995年10月22日）

鷲見離村式。1995（平成７）年10月22日、八幡神社境内で執り行われた。
この日の夜にご神体が余呉町東野の八幡神社に移された。写真前列手前が畑野佐久郎余呉町長

遷座を前に社務所での最後の会食。
県・町・ダム建設関係者も招かれた（1995年10月22日）

言葉少なく茶碗酒を酌み交わす。
上座にはご神体を収める長持の準備が整っている（1995年10月22日）

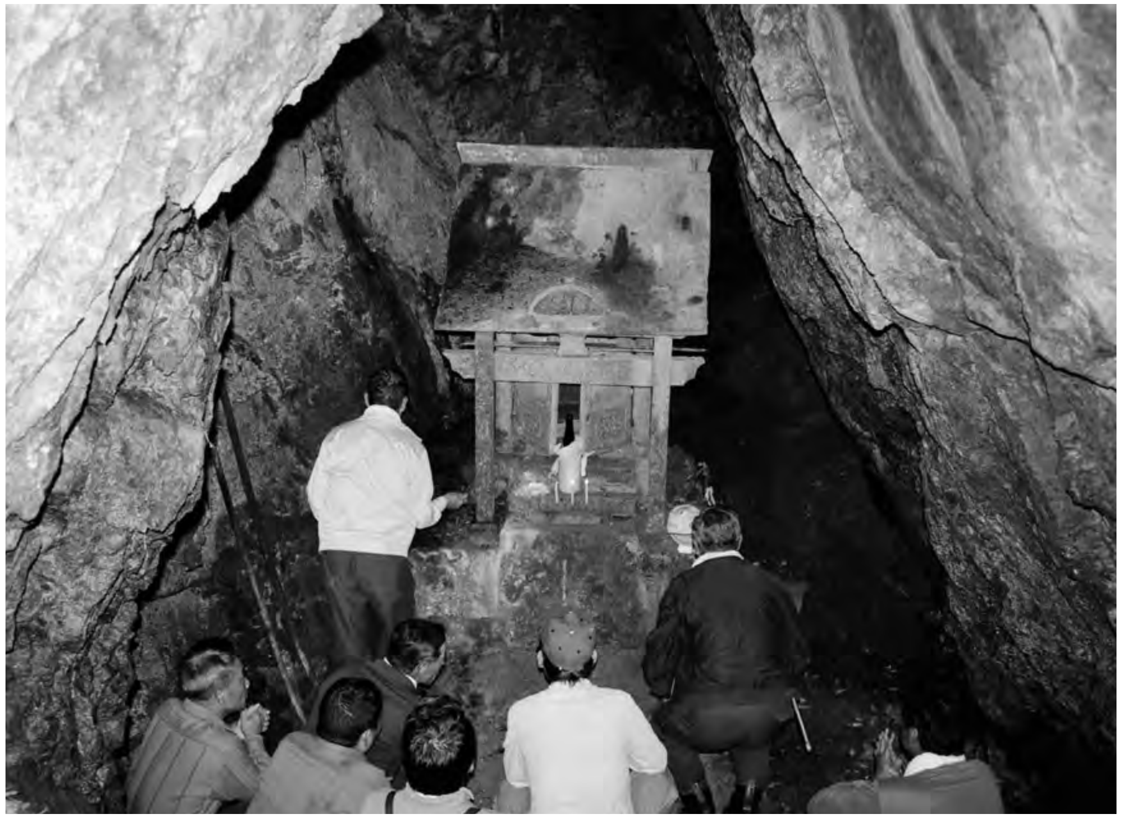
こんな会食は村人の誰もが初めての経験。
別れの会をテレビ局も取材した（1995年10月22日）

女性や家族は屋外のムシロで円座をつくる。
晩秋10月の夜は寒かった（1995年10月22日）

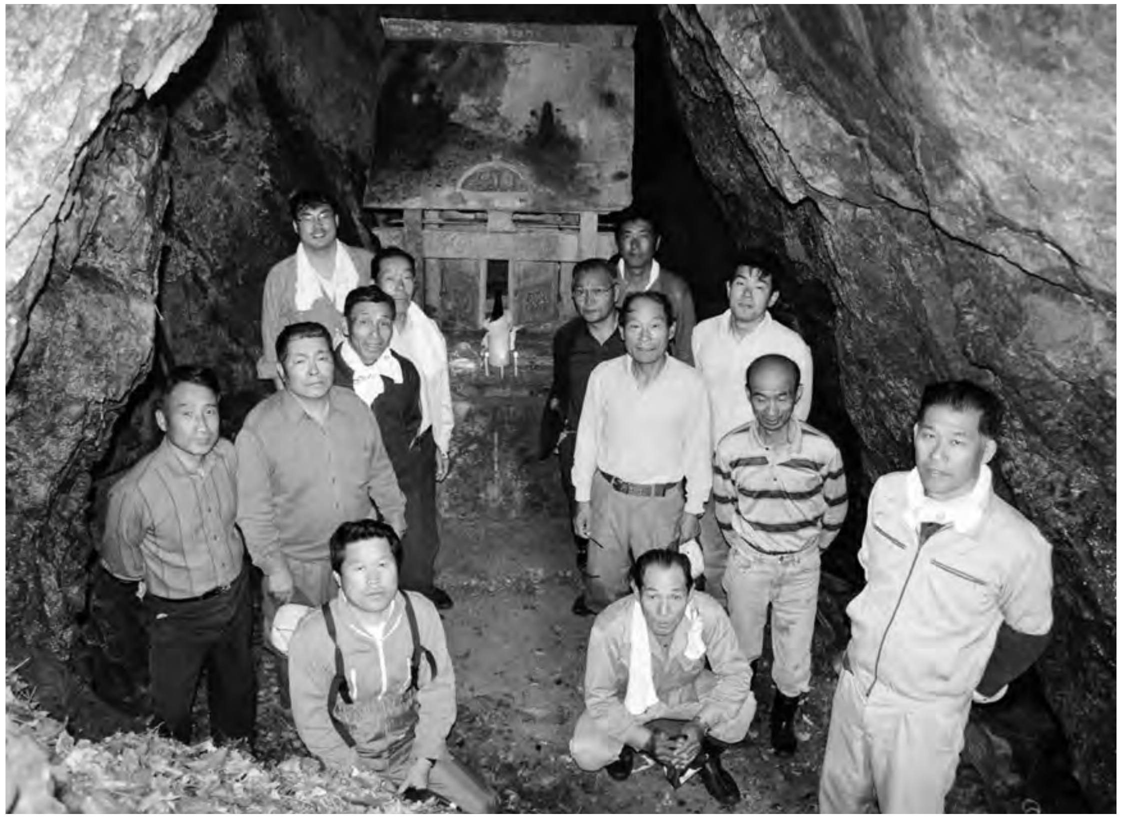
神移し。ご神体が社殿を出る。
照明はなく提灯の明かりだけが頼り。厳粛な光景だった
（1995年10月22日）

遷座の列は鷲見川を渡って村を出る。
祝い唄はない。無言の行列。行先は東野・八幡神社
（1995年10月22日）

今度は鷲見の野神移し。
「ひゃ〜冷たい」高時川の清流を素足で渡って野神鎮座の岩窟へ進む（1996年）



鷲見野神最後の日。提灯も供物も何もない。
「平穏無事をありがとう」と村人みんなが手を合わす（1996年）



鷲見の野神、厨子開扉前の記念写真。
これから移住先の余呉町東野に新築された西念寺境内のお堂へお移りだ
（1996年）

鷲見の野神のご神体は石だった。
もうこの岩屋へ誰も来ることはないだろう。
最後の記念写真（1996年）

野神を背負い再び高時川の清流を下る。
行先は余呉町東野の新天地、新しい堂が待っている（1996年）

白布で包まれた鷲見大明神を西念寺本堂入り口に
新築された御堂へ運ぶ谷口到さん（1996年）

田戸離村式。氏神春日神社で最後のお別れ。
穏やかな式典だった（1995年8月24日）

田戸・小原離村式。
田戸と小原の氏神はどちらも春日神社。1995年8月24日、２つの村の離村式は同じ宮司のため時間をずらして執行された。村人が交代で毎月1日と15日は神酒と榊を捧げ続けてきた。神社での式典のあと御神体は長持に納められ、田戸と小原は別々に、小原は一旦、太々野切さんの家に入り、夜を待って余呉町今市の佐味神社に合祀された。
写真は、田戸・春日神社を出るご神体。田戸は日が暮れるまでに今市に移された

余呉町今市・佐味神社に向かう小原春日神社遷座の列。ご神体の長持は、尾﨑勝幸さんと坂本馨さんが担いだ。
今市の人たちは「ようこそ、ようこそ、賑やかになってよかった。これから仲ようたのみます」と腰を折って出迎えた（1995年8月24日）

第七章 離村

一九六九（昭和四十四）年離村の奥川並、昭和四十五年離村の針川、昭和四十六年離村の尾羽梨の離村式は取材できませんでした。半明も当初ダム水没地域ではなかったことと最奥の村であることから取材不足となりました。一九九五（平成七）年八月末の私の調査時には半明は全戸離村され家々は解体撤去された後でした。一九五七年の火災から復興した半明の村は、あっという間に消えた、というのが私の実感でした。

ダム建設計画以前に離村された三つの村のうち、針川の最後の家が荷物を運び出すようすは撮影できました。一三三～一三五頁の写真です。一九七〇（昭和四五）年十二月八日雪の降る日。「はよせんと雪がひどなるでぇ～、車が動かんようになるでぇ～」と振り返りせかす女性は中川美代さん（一九三一年生まれ、当時三十九歳）であることが写真展で判明しました。「これ私や」と名乗り出てくださったのです。トラック運転は夫の中川璋さんと小原の山崎傳さん。ダブルタイヤの一本を外して雪の山道決死の搬出作業だったようです。

畑野佐久郎元余呉町長は生前「ぼくが余呉村役場総務課のときで、トラックの帰着があまりにも遅いので捜索隊を出そうと協議していたとき、クルマのライトがぼぉ～っと見え職員や待ち受けたみんなで喜び合いました。午前四時でした。途中スコップで雪をどけながらの所もあったようです」と語っておられました。

雪にせかされた針川離村。
中川信夫さん宅の家財道具がトラックに積み込まれている。トラックは南向き。前方の家は1人暮らしの中谷しず江さん宅。夕闇が迫りつつあった（1970年12月8日）

これが見納め針川最後の日。「はよ、はよ」と振り向きながらせかす女性は中川美代さん。
ハチ巻きの人はトラックを運転する夫の璋さんだった（1970年12月8日）

家を閉鎖する中川璋さんにクギを渡す三男克己さん（当時７歳）。
竹スキーを履いている（1970年12月8日）

「行くのイヤや」とぐずる子をなだめてトラックに乗せる親。
くずる子は中川信夫さんの長男の巧さんだった。これで14戸、67人の移住終わる（1970年12月8日）

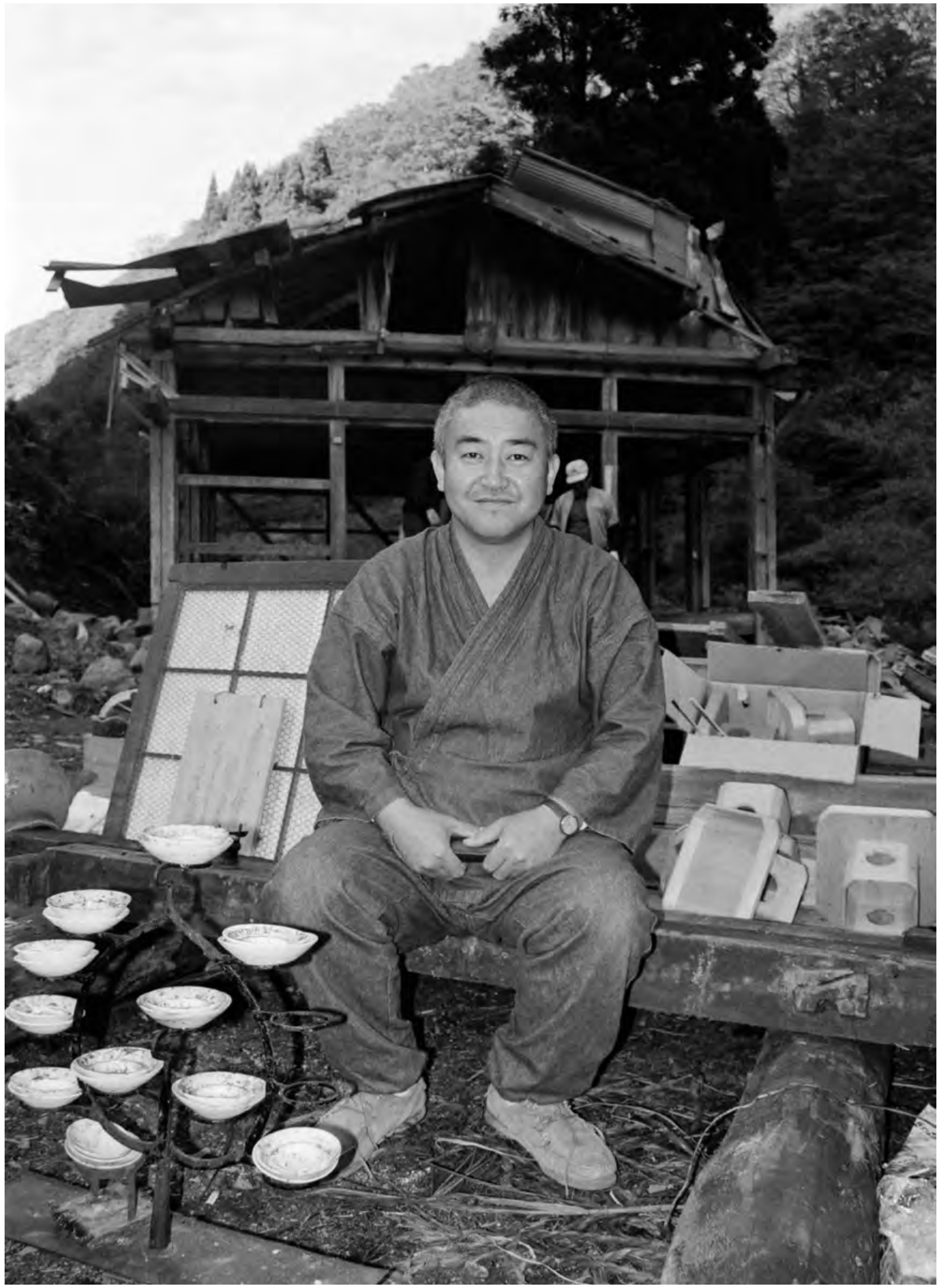
居住用移築のため解体される鷲見・橋詰正道さん宅。愛知県犬山市から帰って来られた。
左から橋詰正道さん、妻房子さん、兄・久保与治平さん（鷲見）、長男の妻佳子さんとその子優香ちゃん、長女奈緒美さん（1996年）

「オヤジが分校の教員時代、1960（昭和35）年に建ててくれた家だからねぇ」
と橋詰正道さん（1996年）

橋詰さん夫妻。
「寂しいわねぇ、でも東野で見違えるようになるわよねぇ」と妻房子さん（1996年）

八幡神社の杉を伐採した中川一男さん。
上丹生の大欅や徳山ダムの伐採にも出向いたという（1995年）

西念寺解体前掃除の中いっぷく。
左から谷口長三さん、久保吉郎さん、中川一男さん（1996年）



西念寺を譲り受けた長浜市川道町、東雲寺の吉田慈敬住職。
寺は伊吹山麓へ移築された（1996年）

鷲見。過半の家が移築・解体を終え、残材を燃やす煙が宙を舞う。９軒が求められて県外へ移築された。
煙の向こうに残るのは森田信一家。この家も移築を待っていた（1996年）

表紙の写真。離村を前に子供たちも帰ってきた。この木橋をみんなが居間のように使ってきた。トチ・クルミ・大豆・落花生や山菜の干場ともした。左から、松本大輔、久保翔平、久保昌美、久保治郎、久保智美、松本千裕のみなさん。右から、上見貞雄、久保陽子、久保清子、久保秀雄、上田建蔵、上田みよの、久保みさゑのみなさん。抱かれている子は松本美沙季さん。
横になっている子は、久保治郎さんの次女かおりさん（1995年）

大津市の叶匠寿庵（かのうしょうじゅあん）へ移すため丁寧に解体される山﨑左馬太宅。
左の太々野切宅も共に移築された。見守る山﨑八重さん（中央）
（1996年）

解体撤去された太々野切宅跡。
この辺りに開村の祖を讃える謎の石組み（35頁）があった（1996年）

田戸・今井巳一宅。大地主だったため堅固な家だった。
この家は叶匠寿庵草津駅西口店となった（1996年）

まず壁が落とされる。大黒柱はケヤキ。
叶匠寿庵草津西口店は平成９年(1997年)にオープンした（1996年）

今井家は明治時代に木炭舟運のため、
高時川の川底の巨石を除去する大事業を行ったとされる家（1996年）

胴梁は重機でそぉ〜っと持ち上げられて柱から外される。
柱の突起部を壊したらおしまいだから（1996年）

墓地改葬に伴う小原の先祖供養法要。通称「オショネ抜き法要」。
平成８年６月２日、離村式より多い人が集まった。墓地は田戸、奥川並とともに洞寿院本堂裏に移され納骨堂も建てられた。
テントの向こうは高時川（1996年）

小原。「ご先祖様、お寺さんで休んどくれやす。
洞寿院の歴代和尚のお墓のおそばです」と手を合わす山﨑傳夫人・山﨑富子さん(中央)
(1996年)

小原。曹洞宗中本山洞寿院の大河内方丈のもとで法要は進む。
この年を最後に土葬の習俗は消えた(1996年)

田戸の墓地改葬法要後の記念写真。６戸の村に空き家だった４戸も帰郷し小原と同日に行われた。
前列左から山口久子、髙橋きりゑ、今井信子、山口たき、山口和子、今井静江、
後列左から今井柳三、山口幸雄、髙橋啓作、今井巳一、山口正信、髙橋久雄、和田源吉、山口昭吾、今井静雄のみなさん（1996年）

木之本町のホテルで開かれた丹生ダム離村記念式典。
４つの村の代表に労いの花束が贈られた花束を受ける人は、小原代表 尾﨑勝幸さん（1996年）

左から山﨑傳（小原）、橋詰正道（鷲見）、
髙橋久雄（田戸）のみなさん（1996年）

西念寺新築落慶法要の委員長を務めたときの谷口長三さん（1995年）

丹生谷の俳聖・谷口秋翠さん

長年、丹生ダム対策委員会委員長として活躍された谷口長三さんの生業は炭焼でしたが、若いころは棲渓子として句道を究め、晩年選者となって秋翠と号されました。奥川並の増田巌さんとは双璧の俳聖でした。丹生谷の人は雪の中でのオコナイの句会などでコトバを研ぎ澄ましてきました。長三さんの俳句数は数知れません。その一部を紹介しましょう。

たまさかの晴れ間は眩し雪の里
春近し水光りつつかがやきつ
水声の和らぎに風光りけれ
緩やかに流るる水や花の邨
はなやぎの水におどりて鮎上る
水蹴って大気にふるる紅鮭
山峡の底なき天に紅葉照る
瀬の楽を一瞬掬う雪の風

どの句にも、山に生かされた平穏な暮らしと、この地に生きる喜びと誇りの心情が滲んでいます。「谷口長三さんはすごい努力家」と今市（小原）の太々野切さんは讃えておられました。

コラム

丹生谷に魅了され歌まで創った長浜のペン画家小野信吾さん

私が小野信吾さんと出会ったのは一九七〇年代、ダムに沈む村の写真記録を始めようと思ったころでした。

私と十七歳も歳の差がありましたが、小野さんのテーマは「日本の原風景」でした。私の思いと重なりあったため、以後深いお付き合いをさせていただきました。

小野作品は、地元湖北にとどまらず、取材の足も東北地方から北海道まで延びていました。奥さんと車中泊で作品を創り続け、奥丹生谷離村の年の暮れに「丹生谷エレジー」という歌を作詞・作曲されていたのです。

全文をご紹介しましょう。

鷲見をスケッチする小野信吾さん（右）（1994年）

おの しんご　大正15年（1926）8月2日長浜市生まれ。父と理容業を営み電気店も経営したがオイルショックで廃業。以後ペン画に打ち込み教室も開き作品づくりに励む。郷愁の長浜、北国街道、奥丹生谷、武生宿、熊川宿、奥の細道、朝鮮人街道など多くの写真集や絵葉書セットにまとめている

丹生谷エレジー

おれの生まれた故郷が水に沈んで消えると聞いた
半明恋しや、いとしや小原、田戸も鷲見も水の底
湖北の山村が、また滋賀の地図から消えていく・・・
二度と帰ることのない故郷を、万感の思いを込めて
振り返り、振り返り振り返りながら離村した人びと・・・
風が吹き抜ける谷間に、もうすぐ冬がくる
何もかも白一色に埋め尽くして・・・

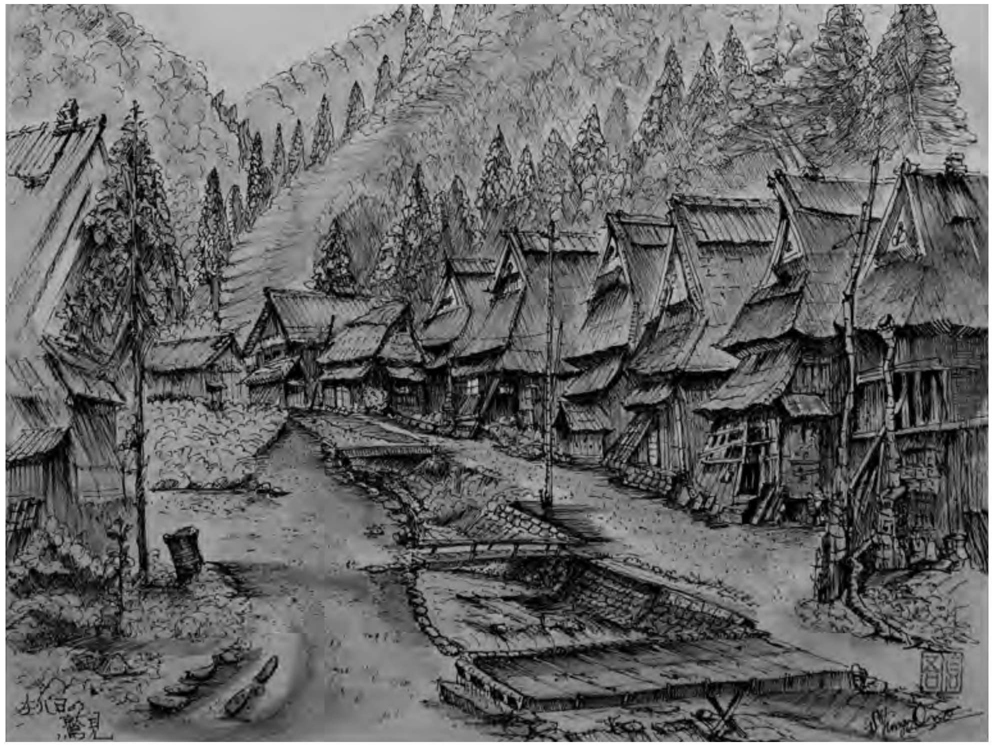
作詞・作曲　小野信吾

一、もう一度帰りたい　故郷へ
老いたる母は　つぶやいた
村の鎮守の　春祭り
半明恋しや　いとしや小原
祭り太鼓が　懐かしい
山はたそがれ　夕日が赤い

二、雪さえなぁー　降らなかったら
囲炉裏を囲んで　独り言
蛍がとびかう　せせらぎや
田戸の茅葺き　鷲見の地蔵
沢蟹とりが　目に浮かぶ
苔の匂いの　水の味

三、山の紅葉が　落ち葉を急ぐ
峠の空は　雪模様
キツツキ啼いて　飛び去る森に
峰の松風　涙をしぼる
空しい響き　丹生谷よ
あの日の夢は　今いずこ

一九九五年十二月創作（離村の年）



小野さんが描いた鷲見（1975年頃のスケッチ）

“懐かしい未来”を照らす希望の写真集に

吉田一郎　湖北アーカイブ研究所所長

「地図から消えた高時川沿いの七つの村」には、いつ頃から人が住み始めたのでしょうか。『余呉町誌』（一九八八年発行）には、古墳時代の鷲見の鷲穴遺跡が最も古いと書かれています。古墳時代や奈良時代には人々が山の資源を求めて暮らしていたことが想像されます。鷲見という地名がつけられるように、イヌワシやクマなどの野生動物も多く生息し、冬のクマやウサギなどの狩猟資源も豊かであったのです。

私が初めて奥丹生谷の存在を強く意識したのは、長浜市役所で広報担当だった頃のことです。大雪や生業の炭焼きの衰退などの影響で、一九六九年に奥川並集落が集団離村する、というニュースが飛び込んできました。翌年の一九七〇年には針川が、一九七一年には尾羽梨が集団離村しました。「写真に記録しておかないと村が忘れ去られてしまう」という危機感をもって村に通い始めたのがこの頃のことです。

私は生まれ育ったのは、長浜市北部の姉川沿いの国友という平野部です。丹生谷に通い始めて、そこでの農業や暮らしのありさまが、私の暮らす国友とあまりにも異なっていることに驚きを感じました。

燃料革命とダム計画

高時川流域に何百年と暮らし続けてきた人々の暮らしが大きく変わり始めたのは昭和三十年代です。炭や薪など森林に依存した生活が成り立たなくなりました。

奥川並、針川、尾羽梨の集団離村先については当時の余呉村が村営住宅を準備しました。ただ、この前期の離村時条件と、ダム計画による集団離村時とは、条件が大きく変わってしまい、住民間に異なる立場を生じさせました。

ちょうど同じ頃、日本全国が高度成長期に入り、都市の水道用水供給や治水のための多目的ダム建設が全国で始まりました。関西地域では琵琶湖そのものを多目的ダムとして開発しようとする「琵琶湖総合開発計画」が昭和三十年代に始まり、一九七二年には国と県、下流自治体が合意して「琵琶湖総合開発特別措置法」が制定されました。

琵琶湖総合開発関係で、湖北の高時川流域でもダム計画が始まり、一九六八年には高時川の小原地先で予備調査がありました。一九七二年に滋賀県が琵琶湖総合開発を受け入れた後、小原、田戸、鷲見の三集落が水底に沈む高時川ダム計画が示されました。当時の『広報よご』をたどってみると、「高時川ダム対策委員会」を立ち上げて、毎月のように余呉町当局、滋賀県、建設省（当時）と交渉した過程が詳しく記されています。水没予定地域では集落移転にともなう生活保障や不安解消とともに、ダム建設予定地の下流部会も含めて全体の交渉がきめ細かくなされました。地元での綿密な話し合いの結果、一九八四年六月にダム建設計画の実地調査協定が調印されました。高時川ダム計画は、総貯水容量一億五七〇〇万トン、堤高は一四五メートルで、当初計画では

二〇一〇年に完成予定で、貯水容量は当時、全国で最大となる計画でした。

このような経過の中で地元はダム計画を受け入れ、一九九五年に水没予定地区の鷲見・小原・田戸で離村式が行われ、翌年には四十世帯すべてが立ち退いていきました。この経過を私自身は綿密に写真記録に残しました。先祖伝来の集落の神社や墓も移動するということは、当事者住民にとっては筆舌に尽くしがたい苦しみであったと思います。撮影させていただいた写真一枚一枚には村人の惜別の思いを込めて撮りました。

嘉田知事の誕生とダム事業の再検討

一九九五年に丹生ダム（高時川ダムから名称変わる）による全集落移転が進んでいたその時期、日本中で河川政策の見直しが進んでいたようです。日本で初めての明治河川法は堤防を高くして河川の中に洪水を閉じ込める治水政策が中心でしたが、戦後の高度成長期には利水機能が強化され、全国に二〇〇〇を越える多目的ダムが計画、建設され始めました。しかし、河川が持つ本来の生態系維持機能が軽視されコンクリート化が進む中で、一九九七年には河川法が改正され、治水・利水に環境保全と住民参加が追記されました。この改正内容を反映して関西では二〇〇一年「淀川水系流域委員会」が始まり、マスコミの注目度も高く、二〇〇五年七月には丹生ダムを含むダム見直しを求める意見書が提出されました。大阪府、京都府および阪神水道企業団のいずれもが利水の全量撤退の見込みだったようです。しかし当時の滋賀県の國松知事はダム推進の方針は変えていませんでした。私たち地元住民としても、国が決めたダム計画が途中で変更されるなど、まったく想像もしませんでした。

実は私自身は二〇〇一年に当時の丹生ダム建設母体である水資源開発機構と余呉町の畑野佐久郎町長に一九六九年から一九九五年の全村離村までの奥丹生谷の暮らしや自然について撮りためていた写真をもとに、写真集の提案をしました。しかし、予算確保など困難で、結局、提案は実現せずに二十年がたちました。

今回の写真展示と写真集の出版はまさに二十年間の「熟成」期間を経て実現したことになります。私にとりましては感無量です。この二十年の間に離村された方たちは高齢化し、亡くなられた方も多かったです。しかし、子どもさんやお孫さんが生まれ育ち、今回の写真展示には子孫の皆さんも来ていただき、その声も写真集に掲載できました。そのような意味で、この写真集は撮影時から振り返りますと五十年の「熟成」の結果であることに私自身改めて関係者の方々に感謝しています。

二〇〇六年七月の滋賀県知事選挙に嘉田由紀子さんが栗東の新幹線新駅や県内ダムの凍結・見直しを掲げて当選されました。実は嘉田さんは一九八〇年代の琵琶湖研究所時代から長浜の町の歴史や文化、とくに米川や米川支流の保全の住民活動などに関心を持って調査研究をされていました。最初に嘉田さんと出会ったのは『長浜百年』という私が編集した写真集に感動したと言って長浜市役所を訪ねてこられたときでした。一九八〇年頃のことでした。その嘉田さんが知事選挙に出られ、公共事業の見直しを提案されるなど予想もしていませんでした。

嘉田知事誕生後には、琵琶湖淀川の下流受益地で建設費を負担する予定だった大阪府・京都府・阪神水道企業団も丹生ダム見直しに賛同を表明しました。理由は水需要が減少しダム建設の必要性がなくなったということでした。一方高時川流域住民の間からは「知事の方向転換は無責任」とする批判が高まりました。昭和

四〇年代以降、三十年かけて地元での熟議を重ね、神仏含めすべての住民が移転を済ませていることに加え、丹生ダムを建設した場合は高時川下流域への治水効果がありました。そこで嘉田知事は「自らの治水政策の瑕疵により、一人でも死者が出た場合は知事を辞職する」と県議会で覚悟表明し、治水政策には地域密着型の流域治水政策を中心に全力をあげる方針を示しました。

丹生ダム建設の中止へ

丹生ダム建設予定地である地元・余呉町は、知事の政策転換に対し一貫して反発の姿勢を示しました。ダムによる固定資産税という歳入、およびダムの人造湖を活かした観光開発などによって財政再建を目指していたことから余呉町は知事に激しく反発し、対決姿勢を鮮明にしました。二〇〇七年四月、嘉田知事と地元・余呉町および丹生ダム対策委員会との協議で、丹生ダムは建設するとしても国土交通省が当時示していた治水限定穴あきダム案までで人造湖はできないと示唆した嘉田知事に対して、当初の計画どおり一億五七〇〇万トンの貯水量を保持するダム案以外を受け入れる気がない、と丹生ダム対策委員会の委員たちは猛反発で、委員会自体が一時解散しました。その後は余呉町が窓口となって協議していく方針となりましたが、県と町側の溝は埋まらない状態がしばらく続きました。

二〇一四年一月、国土交通省は丹生ダム建設を中止する方針を決定しました。治水ダムとして建設した場合、二百四十六億円から三百三十九億円の建設コストがかかるのに対し、河川整備なら八十億円程度で済むとして「ダムは有利ではない」と国土交通省が結論づけたのです。なお、国が計画したダムのうち、住民の立ち退き移転後の中止決定は全国でも初めてであり、すでに調査や用地買収、周辺工事などで計五百六十七億円が費やされていました。

嘉田知事は二〇一四年七月、任期を終えて引退し、この問題は三日月大造知事に引き継がれました。二〇一六年七月、国土交通省は丹生ダム建設中止を正式に決定し、「丹生ダム建設事業の中止に伴う地域整備協議会」が設置されました。同協議会は丹生ダム対策委員会、国土交通省近畿地方整備局、滋賀県、長浜市、独立行政法人水資源機構の五者において基本協定を締結。そこには「自然・文化・歴史を活かした個性ある産業が息づき、地域住民が安心して生活でき、誇りを持ってふるさとを守り育てる魅力のある余呉地域を創生」が謳われています。この協定書を踏まえ、当該地域の地域振興に必要な事業の実施を図ることを目的とし、二〇二一年に至るまで主に次の三種類の事業が進められています。
①高時川の河川整備②道路整備や買収済み用地や残存山林の活用
③地域振興として地域の歴史と記憶を継承するまちづくりです。これらの事業は基本的に国費である近畿地方整備局予算が充当されています。

「懐かしい未来」を示す場に

現在、七つの集落の地名も地図から消え、この写真集の二〇四から二〇八頁の写真にあるように、かつて建物や田畑があった地域にも草木が茂る源流部が残されました。今後、この流域は日本全国から見ても貴重なブナ帯の生態系が残り、ユキツバキ群落の南限ともなっている貴重な地域と評価されるでしょう。「高時川源流の森と文化を継承する会」を中心に、旧余呉町地域に二四一本あるといわれるトチノキの巨木保全運動も進められています。奥丹生谷では滋賀県で最大の樹齢五百年以上と推測されるトチノキも発見されています。

トチモチづくりやイタヤカエデの小原カゴづくりの技能も太々野切さんが継承し、山村文化の維持保全も期待されています。地域住民による炭焼きの再現や、生態学者による焼き畑再生も始められています。この地域は近畿全体の水資源の涵養機能も高いと言われています。

琵琶湖研究所の初代所長で国際的にも高名な生態学者であった吉良竜夫さんは「高時川流域は北日本型のブナ帯地帯の南端部の貴重な生態系が残り、ユキツバキの南限でもある。この生態系は何としても守りたい」と言っていたそうです。

写真展には旧住民の皆さんも含めて多くの方々に来ていただきました。「懐かしいなあ」「ほんま、あのころはお互い助け合っていたなあ」との声もありました。写真展を通じて、ふるさととは何か、豊かさとは何かを多くの人たちが感じ取っていただいたようです。この地を離れた人たちのお孫さんやお子さんは、東京など首都圏からもたくさん来場していただきました。この人たちの中には「こういうところで暮らせないか」と考えている若い人もおられるようです。

今回の写真記録は、思いがけない出会いの場を捉え、過去の写真が持つ貴重な力を示す機会となりました。今、地球規模の環境破壊を憂い、コロナ感染症で悩み苦しんでいる大都会で暮らす若い人たちに共感してもらえる「懐かしい未来」の一例になればと考えています。奥丹生谷の自然や暮らしを記録させていただいた当事者としては、今後も高時川流域の人々の暮らしと自然の再生が進められるよう、応援させていただきます。

ダム建設の経緯

1968年（昭和43）10月	予備調査を開始
1972年（昭和47）12月	琵琶湖総合開発計画に高時川ダム（現丹生ダム）の計画を計上
1980年（昭和55）４月	実施計画調査着手
1982年（昭和57）８月	淀川水系における水資源開発基本計画（全部変更）に高時川ダムとして位置付けられる
1984年（昭和59）６月	「高時川ダム実施計画調査に関わる基本協定書」締結
1987年（昭和62）11月	高時川ダム下流市町による「高時川治水対策促進協議会」発足
1988年（昭和63）４月	建設事業着手
1988年（昭和63）12月	環境影響評価準備書の公告・縦覧
1990年（平成２）３月	水源地域対策特別措置法に基づくダム指定
1991年（平成３）２月	環境影響評価書の公告・縦覧
1992年（平成４）４月	丹生ダムの建設に関する基本計画の告示（ダムの名称変更）
1992年（平成４）８月	淀川水系における水資源開発基本計画（全部変更）において、名称変更等される
1993年（平成５）８月	ダム建設事業に伴う損失補償基準の妥結・調印
1994年（平成６）１月	淀川水系における水資源開発基本計画の一部変更（事業主体変更）
1994年（平成６）３月	丹生ダム建設事業に関する事業実施方針の指示・認可
1994年（平成６）４月	水資源開発公団事業承継
1995年（平成７）３月	水源地域対策特別設置法に基づく地域指定、工事用道路工事に着手
1995年（平成７）８月	水源地域対策特別措置法に基づく水源地域整備計画決定
1996年（平成８）12月	水没家屋等移転完了
1997年（平成９）６月	淀川水源地域対策基金のダム指定および業務細則の決定
1997年（平成９）	河川法改定　利水、治水に加えて、環境保全と住民参加が明記
2001年（平成13）	淀川水系流域委員会設置
2005年（平成17）	淀川水系流域委員会、丹生ダムを含む５ダム計画の見直しを国に求める
2005年（平成17）	國松滋賀県知事、「丹生ダムは必要」と国に要望
2006年（平成18）	淀川水系流域委員会、嘉田由紀子委員が滋賀県知事選に出馬、当選
2008年（平成20）	京都府、大阪府、阪神水道事業団が水需要の減少から丹生ダムの負担を拒否
2016年（平成28）	国土交通省、丹生ダム事業中止を決定。 丹生ダムよりも河川改修が有利と判断。

山に生かされる

【対談】
大西暢夫（写真家・映画監督）
Nobuo Onishi
×
吉田一郎
Ichiro Yoshida

山の情報伝達のすごさ！

司会　吉田さんは「琵琶湖源流の美と暮らし」写真展ではどのような点を見ていただきたいのでしょうか。

吉田　民俗学者の柳田國男が自著『雪国の民俗』で、「雪国の冬暮らし」というのは囲炉裏端で生活用品をつくる暮らしで、日本人の心の原型は囲炉裏端から育った、と書かれていました。囲炉裏端は子どもたちの教育にとっても大事な場となっていたと思うのです。それが都会人では見えないし、そこのところをみんな忘れてしまっている。私はまさに囲炉裏端のように奥丹生谷からいろんなことを学びましたので、そこを振り返って写真展を見る人に感じていただけたらと思います。

大西さん（左）と吉田さん（撮影は古谷桂信。2021年10月16日、写真展会場の洞寿院で）

司会　その点は大西さんも共感なさるのではないですか。

大西　そうですね。若いときはわからないですが、歳を重ねるとわかることがあります。徳山のばあさんとか、じいさんたちのその生活の一年間のサイクルって、毎年似ているんです。でもその春夏秋冬の中にそれぞれ物語があって、単純な動きなんですけれども、どんな生活にもいろんなことが応用できるなということが今になってわかってきました。囲炉裏端っていうか、話す場所というか、そういう場があったことにたいへん意味があったと思います。じいさん、ばあさんには、テレビやラジオや新聞などのメディア的な情報は入ってこないはずなのに常に話題はいっぱいあって、いつも「あーだ、こーだ」と笑って、新しい話でいっぱいになる。話題豊富といいますか、それが不思議だったんです。

司会　その話題の豊富さ、具体的にどういうことが豊富だったのですか。

大西　春夏秋冬でも、春と秋が一番の収穫期ですよね。たとえば春の山菜の時期となると、去年はここでたくさん取ったのに、今年はぜんぜんで、違う谷の方にたくさん出ている。というような話がインターネットよりも早く、みんなの中に情報共有がなされています。どこでどういうふうに情報共有がされているのか、まったくわからないのにみんな知っている。今年のワラビは去年よりも太くていいということまで。そうすると今年のワラビは揉んで干したほうがいいか、塩漬けにしたほうがいいのか、という話題になるんです。そういうことが年によって動きが違って、僕らにとっても新鮮で面白い。

峠をはさんでの交流

司会　大西さんの揖斐川上流徳山と吉田さんの高時川上流域は峠をはさんで背中合わせで気候的にも近いですね。大西さんはその違いと共通点、どうお感じでしょうか。

大西　『ホハレ峠』にも書いているのですが、徳山の人はほとんど揖斐川沿いから山を降りていない。むしろこっちの滋賀県側から出入りしていますね。山暮らしで、ほとんど町のことを語ることはなかった。それこそダム建設で補償金が入り、現金が動きはじめてから岐阜県側に降りるようになったのです。たいがい昔の話を聞くと、ほとんど滋賀県側がメインルートなのです。木之本の話はよく出てきますね。

大西暢夫著『ホハレ峠―ダムに沈んだ徳山村百年の軌跡』（彩流社、二〇二〇年）
ホハレ峠のある岐阜県徳山村はダム建設のため一九八七年に廃村。その峠に一番近い集落に最後の一人となるまで住んでいたのが廣瀬ゆきえさん（一九二五―二〇一三）。徳山村のかつての生活を通した思いが、彼女の聞き書きで綴られている。

吉田　江州街道を通り八草峠を越えるということですね。

大西　滋賀と岐阜の県境ですけど、徳山の人たちにほとんど県境という意識はないんです。大垣とか、岐阜に出かける方が、徳山の人びとにとっては大イベントでした。最寄り駅が木之本だったということもあり、ここにメインルートがあったなと。

吉田　ゆきえさんがはじめて繭を運んだのも滋賀県の高山でした。あれはスゴイ話でしたなぁ。中学校を出たばかりの娘が繭を担いで峠を越えて琵琶湖を見下ろす！。徳山産のトチの板をボッカ（肩かつぎ）で運んだ先も、ホハレ峠を通り木之本側だったのですね。

司会　今回、お二人の話をうかがうと、あらためて尾根筋でつながる通行圏、社会圏の姿が浮き彫りになりますね。山は自給できて、買うのは塩くらい。味噌、醤油も自給していましたものね。

大西　そうですね、塩と時々、ランプの灯油がほしいということがあったくらいで、あまり現金を使うところがなかったようです。

季節ごとの豊富な山のめぐみ

大西　『ホハレ峠』で書いた廣瀬ゆきえさんなんか豚肉を食べたのは昭和三十年代の後半。それまではずっと野生のものばかり。ウサギとかトリとか、クマですね。イノシシやシカは徳山にはあまりいなかったみたいで食べなかったそうです。そういうものは冬の食べものでしたし、春も夏も秋もそれぞれ季節の食べものがある。それがいつのまにか、季節のない食べものになってしまいました。山にいたお年寄りたちの話を聞くと、食べものだけでも季節の生活のリズムが整えられるのです。それが山地のこういうところにいっぱい残っていたと思います。

おおにし　のぶお　写真家・映画監督。1968年生まれ。東京綜合写真専門学校卒業後、写真家で映画監督の本橋成一氏に師事。98年フリーの写真家として独立。2010年より生まれ育った岐阜県揖斐郡池田町に拠点を移す。著書に『おばあちゃんは木になった』（ポプラ社、第8回日本絵本賞）、『ぶた　にく』（幻冬舎、第58回産経児童出版文化賞大賞、第59回小学館児童出版文化賞）、『徳山村に生きる』（農文協）など。ドキュメンタリー映画は『水になった村』（第16回EARTH VISION地球環境映画祭最優秀賞）、『家族の軌跡―3.11の記憶から』、『オキナワへいこう』など

司会　吉田さんの写真パネルに「山野のめぐみ」がありますが、今の大西さんの話を聞かれて奥丹生谷はどうですか。

吉田　焼き畑というのは、奥丹生谷に行くまでじつは知らなかったのです。三年作ったらそこを捨ててまた別の場所に移るということすら知らなかった。焼き畑をする場所は「ハダレ」といって村の共有地だったということも知らなかった。あの焼いた灰だけで、赤カブをつくり、ソバをつくり、小豆をつくってきた。あの知恵ってすごいなぁと思います。トチにしても澱粉が多く、高栄養食品なんです。それに食べ方にしても、いろいろあります。バイにしても子どもがカゼ引いたらバイの実二粒食べさせろという具合に。知らないことばかりで、暮らしの知恵というのはスゴイなと思いますね。

司会　焼き畑は、三年で別の場所に行ったとしても、それは捨てるという表現ではなく土地を休ませているのですよね。

大西　熟成期間ということですか。

司会　木がまた大きくなって、三十年くらいでまた使えるようになる。だから三年収穫したら、しばらく土地を寝かせる。また三十年後くらいに木が育ったら、灰を使うために一世代くらいで共有地を回していく。本当に合理的な山の使い方で、日本中でしていたのですよね。「休閑」という言い方をします。

吉田　焼き畑の産物は赤カブ、二年目がソバ、三年目が小豆です。

司会　赤カブは、集落ごとに形が違う。焼き畑は共有地。これは重要なポイントです。

バイについてお聞きします。吉田さんが暮らす（長浜市）国友村から奥丹生谷は二、三十キロしか離れていないですね。バイの実をたべたことなかったのですか。

吉田　バイは、お隣からもらって食べたことはあったのですが、なんか美味しくないという感じでした。でもとにかく珍しくて新鮮でした。

大西　山には取りにいっていましたけど、バイはカヤの実のことですよね。見た目はほぼ同じなのですけど、裏が白いのが食用で、緑色のものは美味しくなく、油取り用だと言っていました。バイは方言、和名ではたぶんカヤの実ですね。徳山からこのあたりまでの滋賀県北部でいう地方名で、バイって徳山でも言います。吉田さんがいわれたのを聞いて滋賀県でも言うんだ、とちょっとびっくりしました。

吉田　トチにバイ、それに「クチ」もありますね。解禁日は九月十日くらいからお彼岸までの間あたりですね。山の恵み一つとっても、ここらと徳山村は同一文化圏みたいなものですね。

飢饉への備え

司会　吉田さん、自給して暮らしてきた奥丹生谷の方々にとっても、やっぱり野菜一つ買うことへの切なさはあるんでしょうね。

吉田　猫の額のような土地を舐めるように大事にしておられましたからね。今でも、下流に移られた方は野菜などを作っておられます。自分の家の庭先で、前栽に土を入れて畑にしておられてね。

司会　それでやっぱり自給という安心感なんでしょうね。

大西　そうですね、徳山のばあさんたちも、いつも安心感のためにソバを植えていたようです。米がとれなかった時のためにね。余るのがわかっていても保険みたいにいつも植えていました。

司会　今流にいうとリスク管理ですね。

大西　もし冬を乗り越えられなかったら、という不安からでしょうね。そんなときソバの実さえあれば、これでなんとか冬は越えられるという。たぶん何度か米が取れなかったという飢饉に遭っていると思うんです。そんなときソバが救ってくれたという思いがあるから植えているのでしょうね。

司会　山はそれに応えてくれたのですね。

大西　そうですね、現金ではない保険をちゃんと山にかけてくれていたんで、それで食いつないだ。だからもう生き方が半端なく強いというか。

水と電気、そして離村

司会　写真展で紹介されている小原の清水（ショウズ）に見られる水は湧き水ですか。

吉田　谷水が噴き出していたんでしょうね。そこを上手く利用していました。ショウズは一年中枯れることはなかったです。

司会　年中枯れることのない冷たい湧き水で、飲料水はもちろん、野菜や食器洗いにも使っていた。とにかく飲料水はここだったのですね。

よしだ　いちろう　1942年、長浜市生まれ。長浜市役所勤務のあと、長浜城歴史博物館館長、国友鉄砲ミュージアム館長などを歴任。カメラを持ち始めたのは市役所の広報担当職員時代から。父祖から受け継いだ田畑を耕作しながら、地元の暮らしや民俗を追い続ける。2001年、ペンネーム国友伊知郎の名で『北近江 農の歳時記』（サンライズ出版）を出版。同年、『湖北賛歌』（吉田一郎著作刊行会）を出版。両書で第５回日本自費出版大賞を受賞。そのほか、『写真集長浜百年』（長浜市）の編集や『目で見る湖北の百年』（郷土出版社）の総合監修、『画文集・私の長浜』（同）の監修など

吉田　ここだけです。山崎傅さんが自治会長のときに水道を引かれたらしいんですが、水道を引いてもなおかつここを利用していました。簡易水道は入ってきたのは昭和三十年代です。

司会　当時は日本中に簡易水道が入りましたからね。

吉田　高時川流域六か村の全部に電気が入ったのは昭和三十六年です。

大西　それは徳山でも似ていますね。それまでは小水力発電で自家発電していました。本にも書いていますが共有林を売って、ドイツ製の発電機を買った。その一年後か二年後に中部電力が入ってきた。昭和三十七年と言いますから似たような年代です。昭和三十九年の東京オリンピックのときにすでにテレビ入っていましたしね。

吉田　奥丹生谷の集落にもテレビは全部の家ではないけれど入っていました。住民たち都会の生活との落差に愕然としてね。そして炭がとうとう売れんようになりました。生業の炭焼きも廃れて生活に困窮しついには移住せざるを得なくなったと言うことです。住民たちは移住先を探してくれと余呉村へ陳情に行くと、村は建設省にダムを造ってくれと。これは日本で初めてダムの建設を住民側ら陳情した例です。

司会　余呉村がダムを誘致したそうですが…。

吉田　議事録は残っていませんが、その誘致を受けて建設省が昭和四十三年から地質調査に入ったとされます。奥川並、針川、尾羽梨は、ダム建設計画の具体化が待てなかったのですね。共有林は、結局、営林署が買い上げたんです。一軒わずか五万か十万円とかで。鷲見も地区内では針川に次いで移転する話を決めていたそうです。ところが営林署の予算がないということで、共有林の買い上げができんということで移転がズレてしまった。

先に離村された三集落の方は、気の毒やなぁと思います。ほんとに今も一部の方は町営住宅に入っておられます。この落差がものすごく大きいなぁと思います。

司会　奥川並の方は、ダムに沈むところにも土地を持っておられたのではないですか。

吉田　奥川並の方の土地所有状況は、よくつかめていません。半明なんかはダムに沈まなかった村で、ダムの補償対象外やったんですが、町長がうちもダムの対象にしてくれちゅうてね。それで半明の下流に砂防ダムを設置することにして、砂防ダムに沈むからということで補償の対象になったのです。

特価品のネギが買えない理由

司会　何もかもが自給できていたのに、町に降りて特価品の三本九十八円のネギを買うことが情けない。自分は農民だったのに、自分で作ってみんなに分けてあげてきたのに、なんで今さらネギを買わないといけないのか。ダムでご先祖さまが育ててきた土地や村を（自分の代で）手放した自分が情けない。『ホハレ峠』の主人公、廣瀬ゆきえさんの切ない気持ちですね。少し背景を説明いただけますか。

大西　ゆきえさんは、ずっとハンコをおさなかったんですけれども、まあ最後には調印しています。ハンコを押すとこれまで見たこともない大金が入ってくる。銀行に行って通帳を印字しにいったら見たこともない数字が並んでいる。ゆきえばあさんは正直に嬉しかったといっていました。

吉田　丹生谷でも、補償金で皆さん立派な家を建てられました。

司会　大きな家でしたら固定資産税も高いですからね。結局、フローの収入が少ないでしょう。国交省（が出したお金）は、もうその時に家を建てるだけで精一杯です。その後は、山からの収入も多くないので食いつぶしていくしかない。

吉田　奥川並、尾羽梨、針川の方が本当に気の毒です。先行離村した彼らにはダムの補償金さえ出ていませんからね。水没地域に土地を持っておられた方には、土地買収費はあったでしょうけど、ほとんど村の共有林でしたから。

大西　補償金の使い方というのは国土交通省がレクチャーしていて、成功したところにバスツアーなんかで行くんです。こういう立派な家が建つ、こんな豊かで車なんかも持てると。建て売りのところにも行って、温泉入って、お酒飲んで、二泊三日くらいのツアーなんです。必ずどこのダムでもやっていましてね。それをやりながら豊かさの根源がだんだんズレていくわけです。

司会　大きな家を建てると、どれだけ税金がかかるかということも一応レクチャーされるそうですね。でもそのとき実感としてはわからない。

大西　わからないでしょうね。その時、ゆきえばあさんはもう何千万円が一括払いでボンと入ってきたとき、もうびっくりしたけれども、正直嬉しかった。それが、バカを見たというのが、二十年後。ぼくと会って喋っていく中で、だんだん腹をわって話せるようになってから、「実はな、」と。自分の家は普通の家だけれども、まあ正直なところカネがないと話してくれた。やっぱり夢物語やったと、二十年間がね。自分たちで山に取りに行く暮らしだったのが、次の日から受け身の消費生活に極端に変わってしまった。今まで狩猟民族だったばあさんたちにとって、そんなその生き方はぜんぜん受け入れられなかったわけです。

司会　山か、畑に取りに行く文化がスーパーに買い物に行く文化になった。その象徴がネギなのですね。特価品のネギ三本九十八円…。私もほぼすべてを自給していた農家に育ったので、その切なさはよくわかります。

未来へのメッセージ

司会　未来へのメッセージをお二人からいただいてもいいですか？

大西　ぼくは今五十三歳なんですけど、私が生きたわずか半世紀でこんなに大きく暮らしが変わってしまった。江戸の時代、明治の時代の五十年でもここまでは変化がなかったんではないかと思います。だけど、もうこの先、このまんま（成長することは）は絶対ムリだなというのはたぶん僕らの世代はみんな感じているだろうなと思っています。

司会　徳山と違ってここ奥丹生谷は残っているんですよね。水の底に沈んでいない。日本中で、住民が移転してから中止になった国営のダムはここ丹生ダムだけですから、山も川も変わっていないんです。自然も豊かで川の水も美味しいし、クマもイヌワシなどの生き物もまだいるんですよ。吉田さん、この写真展をきっかけにして、鷲見のあそこにまた家造って暮らそうかと言う人が出てくるかもしれませんよ。

吉田　ぼくもそういう人が出てくることを期待します。でも、わが国の山村の過疎化はいっそう進んで行くのではないでしょうか。この写真の人たちは、ありがたい、ありがたい、という思いで暮らしておられました。写真の皆さんと接して、真の豊かさ、真の幸せとは何だろうと考えさせられました。「生きる喜びと誇りが感じられるかどうか」だと思います。記憶を記録に残す写真展と写真集が未来を考えるきっかけになればと思います。

大西　そこが写真展のすごさだと思いますね。

吉田　ですから、この写真に出てくる親やおじいさんたちの子どもさんやお孫さんたちも見に来てほしいですね。

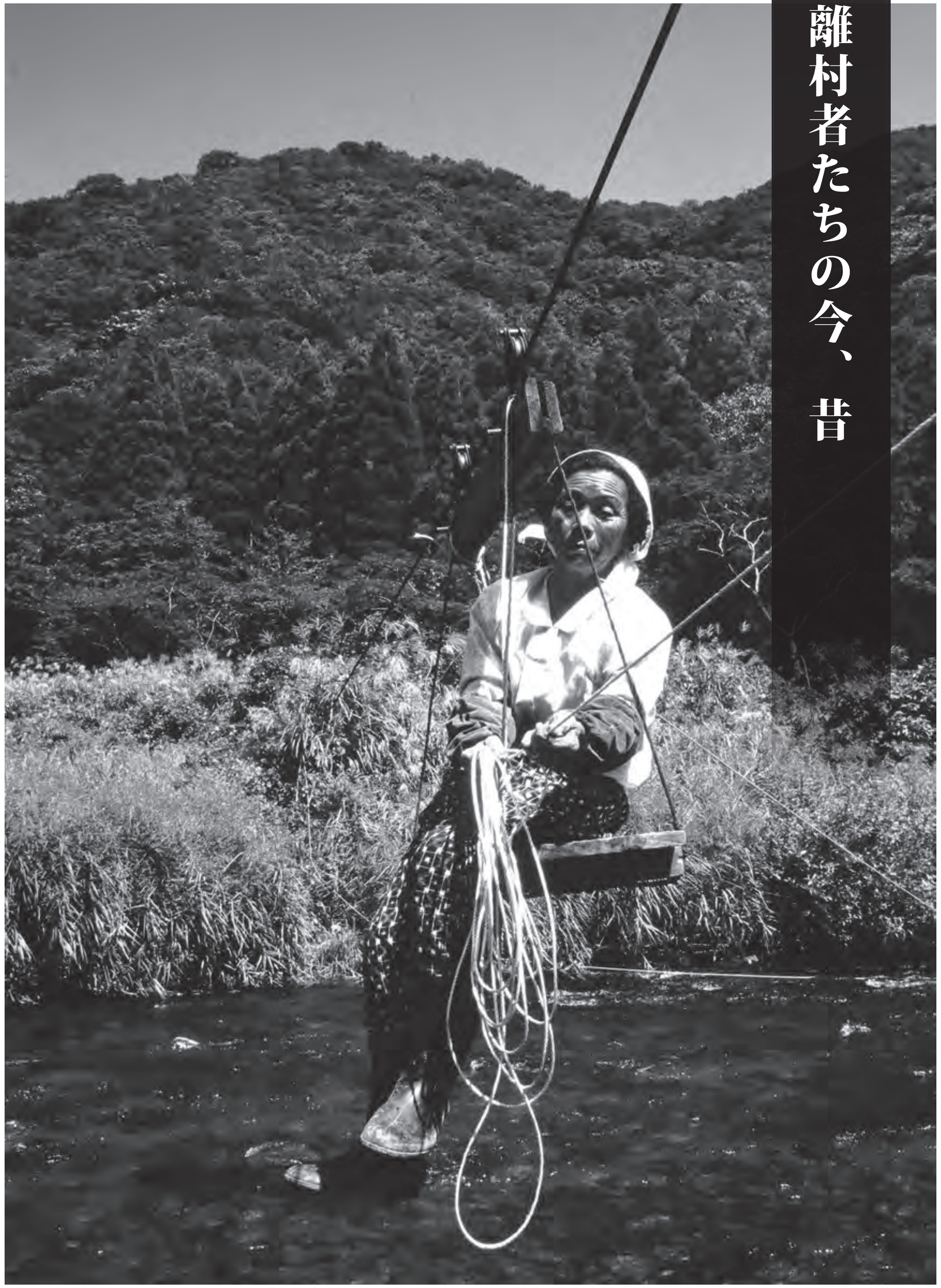
（対談は写真展開催前に収録）

吉田一郎写真展
「琵琶湖源流の美と暮らし」

「琵琶湖源流の美と暮らし」写真展・第１会場妙理の里での初の野外写真展。左の建物では館内展示と小原籠実演。
右の建物の裏にメインの展示コーナー設ける。９日間での来場は約2,000人を数えた（2021年10月24日）

第２会場洞寿院。正面が本堂、左が座禅堂、右が庫裡研修室。その軒下を活用した野外写真展。
本堂裏には小原・田戸・奥川並の墓地が移されている。集落のご先祖に捧げる写真展ともなった（2021年10月14日）

離村者たちの今、昔



苦労の多い田んぼづくり。
高時川の川向いの田へワイヤーで行き来する鷲見の山口はるのさん（1991年）

「ワイヤーの女性はぼくの母です」と山口勝巳さん。
勝巳さんは、山口勇太郎・はるのさんの三男。「かつ味」の屋号で高月町でお食事処を経営する（2021年９月25日）

山口勝巳さんの両親、冬の準備に割木を割る父山口勇太郎さん
とエゴマを収穫する母はるのさん（1991年）

山口勇太郎、はるの夫妻の長女一枝さん一家５人が写真展の両親と会いに帰ってきた。
夫の太田邦雄さんは材木商を営む。洞寿院で（2021年10月17日）

高月町柏原でお食事処「かつ味」を営む山口勝己さん夫妻と
左は奥さんの妹さん（2021年10月20日）

小原の山﨑左馬太さんと妻八重さん。
左馬太さんは寡黙な人だったが、八重さんは腹の底から笑い声を出すような賑やかな人だった。
ショウズ（村の共同井戸）ではいつも笑顔の中心だった（1994年）

「親父のこんないい顔見たことがない」と長浜えきまちテラス会場のパネルの前で長男の山﨑豊秋さん
パネル写真左が父親左馬太さん（2021年12月11日）

山﨑左馬太家の４兄妹夫婦が集まった。
長男豊秋、長女千代栄、次女和代、次男喜久雄さんご夫婦。妙理の里で（2021年10月21日）

離村前の田戸での今井柳三さん。後ろの家が今井家。
柳三さんは7人兄弟の３男で家を継いだ（1994年）

「信子は３年前に死んだ」と妻の遺影を手に今井柳三さん。
娘さんは3人とも嫁がれ今は一人暮らし（2021年９月25日）

「昔はこんな格好で山仕事に行った」と蓑笠を着ける高橋久雄さん。
屋号は松五郎。通称「松さん」（1994年）

「おっかぁは10人の子どもを産んだ」と
母きりゑさんのパネル手に母を偲ぶ田戸・髙橋久雄さん。
余呉文化センターの巡回展で（2021年12月２日）

離村の年。
高時川で最後の精霊流しをする小原の坂本馨・多鶴子夫妻。
川の盆棚に思いを込めた（1995年）

今市の新家の前で坂本馨さんと妻多鶴子さん。
多鶴子さんの兄 太々野切さんと２軒で観音堂を守り続ける（2021年９月25日）

小原籠の伝承者・太々野切さん。
若い頃は養蚕、炭焼き、会社勤めも27年、籠づくりは40年になる（2021年９月26日）

今市に新築した太々野切家（2021年９月26日）。
屋敷の中に小さな畑と小原籠づくりの作業小屋を設けている

法事などで高月の長女森文子さんと宇根の榊邦子さん
一家らが帰ってくるとお祭り騒ぎのような賑わいに（2021年８月お盆、太々野切さん娘婿の榊伝和さん提供）

鷲見、川口一治さん。湖北１市12町で組織された広域行政事務
センター勤務だったため長浜市加納町に居を構え休日には鷲見
に帰っていた（1993年）

「夫は2021年4月に77歳で亡くなりました」と一治さんの妻はる美さん。
「亮人、さや香がいてくれますので」と東野の家で（2021年９月５日）

鷲見川の木橋の上で自転車に興じる川口さや香さんは６歳。1988年生まれ。
68〜69頁の宮参りの子の成長した姿。
うしろは兄の亮人さん。仲良し兄妹だ（1994年）

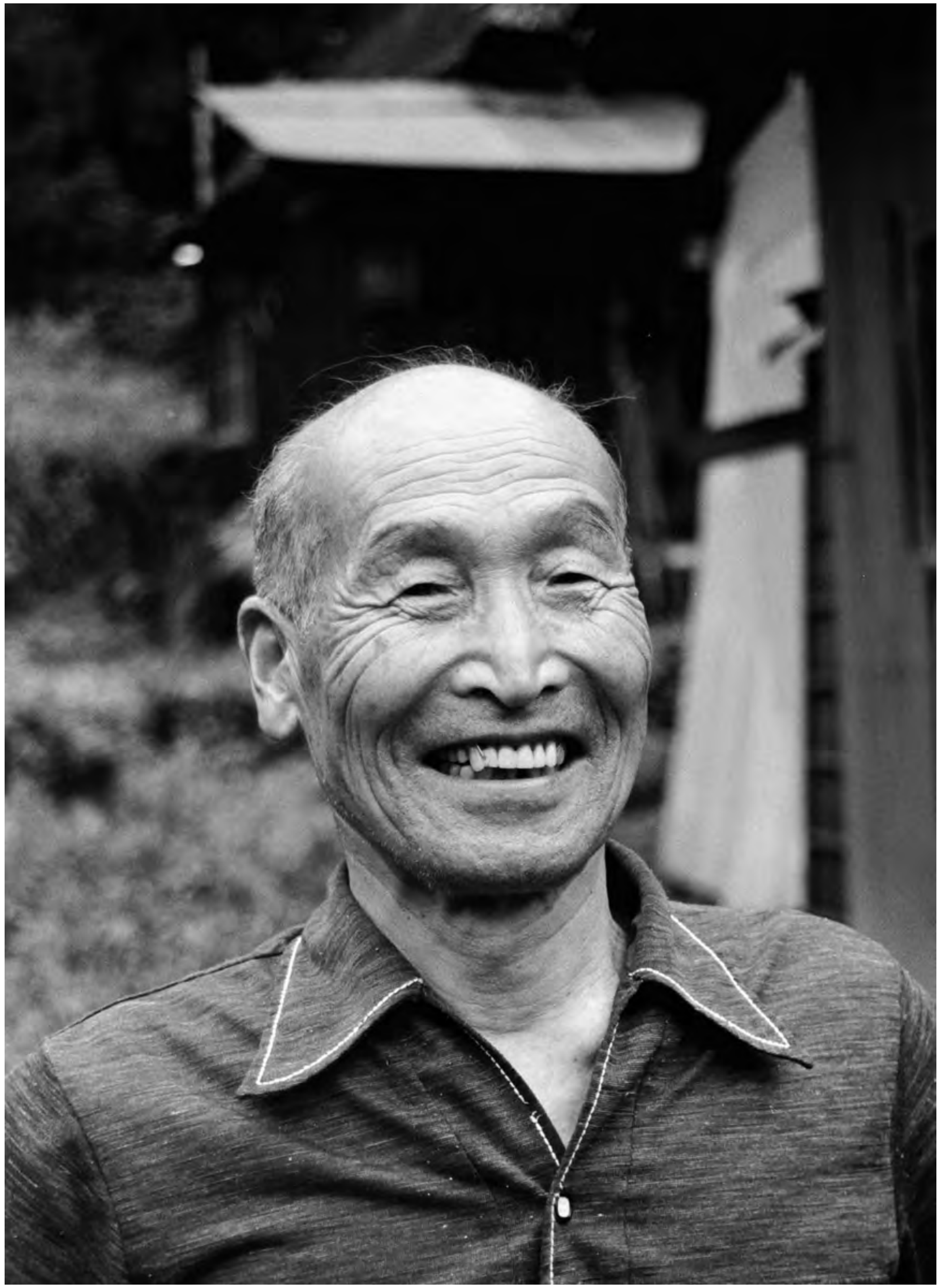
2021年、さや香さんは33歳。今は３人の子のお母さん。上の子は中学生。
宮参りの自分の写真を見て「あれから33年？」。妙理の里で（2021年10月16日）

クマ撃ちの名手・久保吉郎さん。昭和6年生まれ。
３男１女に恵まれたが２男は１歳で亡くした（1996年）

久保吉郎さんの子と孫。
左から秀行さんの妻陽子さん、三男秀行さん、長男治郎さん、
右端は秀行さんの長男翔平さん。洞寿院会場で（2021年10月17日）

父祖の地に価値を求め父の建てた家を余呉町東野に移築した橋詰正道さん夫妻。
犬山市の自宅から余呉に通う（2021年11月17日）

橋詰儀三郎さんの肖像の前で。左から三男眞澄夫人みつ子さん、長女内藤潤子さんの娘里美さん、長男の久保与治平さん、二男正道さん、長女内藤潤子さん、潤子さんの娘婿大杉修弊さん。洞寿院会場で（2021年10月19日）



田戸、今井巳一さん。田戸一番の大地主今井家９代目。
大正６年生まれ。奥川並分校最後の先生（1993年）

田戸の人びとの大パネルを見つめる今井巳一さんの孫娘夫婦。
洞寿院で息子の静雄さん（写真パネル後列右端）とはお会い
できなかったのが残念。（2021年10月24日）

尾羽梨分校閉校時の子どもたち（1971年）
（柴田郁造先生提供）

尾羽梨集落写真を手にする柴田郁造先生。昭和44（1969）年から46（1971）年の閉校まで、
尾羽梨分校の教諭を勤めた。村の人からは、先生様と呼ばれていた。（2021年10月16日）

小原分校に赴任した肥田嘉昭先生夫妻（左から３、４人目）と教え子が
写真展会場で再会した。
教え子籾山正子さん（左）らが先生を誘った。洞寿院で（2021年10月18日）

谷口長三さん家族を洞寿院会場で案内する別府元彦先生（手を広げている方）。長女の充子さん（右端）が別府先生の教え子。
「新任の教諭だったにもかかわらず、村の人は先生様と呼んで大事にしてくれた」と、別府先生（2021年10月24日）

1970年の針川最後の日、「これが見納め、振り返る女性は私です」と
中川美代さん（昭和６年生まれ）。
当時39歳だった。余呉文化ホールで（2021年11月26日）

「このぐずる子は私の主人、ぼくのお父さんです」と、135頁下段の中川巧さんの奥さん
みどりさん（右）とその息子の瑛貴さん。余呉文化ホールで（2021年11月27日）

中川璋・美代さんの三女和美さん（右から２人目）一家。
岐阜県郡上市白鳥町から会場へ駆けつけた。長浜えきまちテラスで（2021年12月12日）

声をかけても反応がなかった谷口長三さん。自宅のソファーで（2021年９月５日）

寝たきりで意識も失われたかにみえた長三さんから声が出た。
写真を指さし「うちの家や〜」「キチローや〜」「オカ（母）や！」。写真展会場妙理の里で（2021年10月24日）

写真を食い入るように見つめる長三さんは、写真展会場で記憶と命を蘇らせた（2021年10月19日）

二〇二一年八月二六日と九月五日、私は鷲見から余呉町東野に移住された谷口長三さんを久方ぶりに訪ねました。長三さんは満九十六歳。ソファーに横たわり目はうつろ、何を話しかけても反応がありません。「長三さん、長三さん」と繰り返し呼んでも「あ〜、う〜」と寝息かなと思えるほどの声で、意識を無くされたかのように見えました。

一〇月十九日、その長三さんが車イスで写真展会場へ来られたのです。その後、最終日には、千代子夫人と一緒に再来場してくれました。息子の到さんと娘の充子さんに連れてこられたのです。

長三さんは元気を取り戻し、写真を食い入るように見つめて、「うちの家や！」と声を出されました。「キチローや！」「オカや！」の声も聞き取れました。キチローは近所の久保吉郎さんのこと、オカは母ひさゑさんがトチの実を干しておられる写真でした。

記憶が蘇ってきたようで、写真を見つめる長三さんの瞳は潤んでいました。それからの日々、長三さんは元気を取り戻されたのです。次男の到さんの言葉です、「奇跡や、奇跡が起こった」。

1975（昭和50）年の鷲見。鷲見川に沿って肩を寄せ合うように伊香型民家が並んでいた。
村は血のつながりが多く大家族のようで、ユイの精神に満ち、自然に寄り添う丁寧な暮らしがあった

離村３年目の平成10（1998）年。橋の欄干と石積み護岸と洗い場と残った電柱だけが暮らしの跡をとどめていた。
キーキーというサルの鳴き声と草を揺らす風の音が肌を刺すように感じられた

離村から26年目の2021年９月19日、村は大自然に呑み込まれていた。人は去っても山河は変わらず。
長い歴史を刻んだとは言え、所詮人間の営みは大自然からの借り物の上にあったと気づかされた

あとがき

吉田一郎　湖北アーカイブ研究所所長

多くの皆さんのご支援ご協力のおかげで写真集『地図から消えた村』ができあがりました。

琵琶湖の源流・高時川上流の奥丹生谷は僻地のように思われてきましたが、古代から中世にかけては北国道が通る重要な歴史の回廊でした。そのため高い文化力をもつ風土が形成され温存されてきました。戦後失ってきた日本人の暮らしが消えることなく残っていることに私は感動しました。そして村々へ通い続けました。

二〇二一年、「写真展・琵琶湖源流の美と暮らし」が滋賀県の「滋賀をみんなの美術館に」プロジェクトに採択され、初めての野外写真展を開くことができました。長浜市のサクライ工芸さんの助言と献身的ご協力で、畳一枚分の大きさのアルミ板パネルを三十枚も作ることができ、ご来場の皆さんに喜んでいただきました。余呉町妙理の里や洞寿院の荘厳な境内に映えました。写真展は、余呉と県立美術館の二会場で開く予定でしたが、余呉文化ホールと長浜えきまちテラスからも開催要請を受け、四会場で四千人近い方にご観覧いただきました。会場には離村された人びとや親戚、友人知人が県外からも帰郷され、同窓会のように再会を喜び合う光景が見られました。

アンケートを見ると、昔のつつましい暮らしと村を大切に守ってこられた姿から自分の幼少のころを懐かしむ声。共感。驚き。夫婦。感動。針川最後の日のぐずる子。泣きそうになった。豪雪、ワイヤーでの川渡り、サルとの闘い、大変だった米作りへの共感、両墓制や洞窟での野神神事への驚き、家の解体を見守る夫婦、ひたすら祈る姿への感動、雪にせかされた針川最後の日ぐずる子をトラックに乗せようとする母の姿に泣きそうになった、離村式、最後の食事会にはドキドキ胸が熱くなった、といった声がたくさん寄せられました。笑顔が美しい写真のおじさんたちに会いたい、といった声も綴られています。

一枚の写真の持つ力、記憶呼び戻し命蘇らせる

写真展を通して、私は一枚の写真の持つ力を改めて感じました。長年ダム対策委員長として活躍されてきた谷口長三さんが記憶を呼び戻した出来事は、二〇二・二〇三頁で紹介させていただきました。

写真展後、訪宅すると、「吉田はん、奥さん元気かいね」と私の妻を気遣ってくださるほどでした。そして「もうじき寺のまつりごとをするさかい、おまんも来とくれ」とも言われましたが、寺のまつりごとは長三さんの幻想でした。移住先に新しい寺を新築した責任者として次は法要をしなければならないという強い思いから出た夢のようです。それほどまでに一枚の写真が記憶を呼び戻し、命をも蘇らせる力があることを実感しました。それは離村された方だけでなく、来場者の多くの方に共通した記憶蘇りだったようです。

私がそこに至るまでには長い道のりがありました。奥丹生谷へ取材に入ってから離村まで二十五年。離村から今日まで二十七年という歳月が経っています。最初は、カメラを向けると顔を背けられた人も、長いお付き合いの中で「まあ、上がってかんせ」と言っていただけるようになりました。この人たちの暮らしとこの風景がもうすぐ消えるという焦りと、これらを今のうちに記録しておかねばという使命感が私の背を押し続けました。

長浜市の広報マンからの出発

私は長浜市の広報を担当させていただいたおかげで「時代を記録する」ことが自分の役目と考えるようになりました。広報マンの目で地域の個性と独自性を見つめるようになりました。文章は三山元暎（もとあき）先輩から、写真はエンヤ写真工芸社の塩谷芳明さんと長浜スタジオさんから指導を受けました。そして、一九七五年ごろ、朝日新聞長浜通信局の吉川宏暉記者から「一ちゃん、いまの湖北の風景や暮らしを写真に残せば歴史になるよ」というアドバイスを得ました。そのひと言がぼくを、ふるさと湖北の写真記録にのめり込ませる力になりました。高度経済成長で農村が大変貌している時代でした。以来、ダムの湖底に沈む村を始め、湖北の民俗、米づくりの一年、畦の木の四季、神々の村、オコナイ、雨乞い太鼓踊り、湖北の祭り、湖北の子どもたち、などのテーマを追いかけるようになりました。

私の取材不足を補ってくれたのが、余呉町からの「高時川ダム建設地域民俗文化財調査団」の委嘱でした。一九八八年度から私が長浜市企画課長のときでした。十四人の先生方と調査に入ることができ、多くの情報を得、村の人から一層の信頼を得ることができました。

湖北アーカイブ研究所設立

本書の刊行は私一人の力でなし得たものではありません。数年前から、『み〜な　びわ湖から』前編集長の小西光代さん、長浜市学芸専門監の太田浩司さんらとアーカイブへの取り組みについて相談してきましたが、資金面と行政の支援面で踏み切れませんでした。

二〇二〇年暮れ、世界と日本の写真史を研究する京都織維工芸大学大学院生の橋詰知輝さんと前滋賀県知事の嘉田由紀子さんから、写真のデジタル化とネットワーク化の提案を受け、先ず、「ダムに沈まなかった村」の写真集づくりから始めようとの意見の一致を見ました。年が明けた二〇二一年から「琵琶湖源流の森林文化を守る会」の小松明美さん、写真家高村洋司さんらとフイルムのデジタル化の作業が始まりました。「琵琶

湖源流の森林文化を守る会」からはデジタル化に必要な資金支援を受け、「湖北アーカイブ研究所」設立に至りました。

その後、滋賀県の「滋賀をみんなの美術館に」の補助事業に採択されて写真展への取り組みが始まり、写真家古谷桂信さんの強力な支援のもとに、三山元暎さんを代表とする「吉田一郎写真集出版委員会」がつくられ、地域誌『ふもと』編集長三田村圭造さんが編集、小西光代さんが資金を確保するクラウドファンディングの実務を担当し、植田淳平さんの指導を得てクラウドファンディングへの取り組みが始まりました。クラウドファンディングでは、モンベル会長の辰野勇さんと、写真家の今森光彦さんが応援メッセージを寄せてくださいました。写真展、チラシ、クラウドファンディング、写真集と一連のデザインは、RINRIEデザインの堤理恵さんにデザインを担当していただきました。

そして三百六十人以上のご支援でこの写真集が完成したのです。

写真展で紹介した写真を全部収録することはできませんでした。「私の写真があったはず」と思われる方もあると思いますが、お許しください。写真集でいちばん苦労したのは、写っている人の名前の確認でした。そのために何回も何回も移住されたみなさんの許を訪ね、名前、生年月日、家族関係、エピソードを訊きました。それを記録した大学ノートは三冊に及び私の大切な財産になりました。

古谷桂信さんから、「鷲見の昔と今の姿を写真集の最後にドンドンドーンと大きく取り上げましょう」との提案を受け、長男と孫と三人で鷲見の地を訪ねました。田戸からは車両通行止めのため三人で歩きました。鷲見では草刈りをして、二〇八・二〇九頁の写真が撮影できました。こころざしを伝える、世代を繋ぐ、ということは難しいことですが、この写真集のおかげで「記憶を記録に」「地域のお役に」という私の願いが私自身の孫まで伝わったのではないかと思っています。「人は去っても山河は変わらず」という事実を三人で共有することができました。

写真展では、余呉地域づくり協議会の是洞尚武会長、ウッディパル余呉を経営するロハス長浜の月ヶ瀬義雄会長、前川和彦社長、洞寿院の竹内昭道（第五十五世）住職、妙理の里の地元菅並地区のみなさんにはたいへんお世話になりました。会場設営や受付、案内では多くのボランティアの方々のお力添えを得ました。

本誌出版にあたっては、丹生ダム対策委員会の湯本聡委員長のご支援・ご協力も賜りました。

さらに、余呉地域活力プランナーの山路満子さん、余呉文化ホールの永井育施設長、えきまちテラス長浜株式会社の米澤辰雄代表取締役、滋賀県立美術館スタッフの皆さん。ならびに、サンライズ出版株式会社の岩根順子社長にもお世話になりました。

お世話になった皆さんに感謝、感謝です。本当にありがとうございました。

三世代が繋がった鷲見行き。
鷲見川は石積み護岸も見えないほど葦やススキに覆われ、草を刈っての撮影。
人家跡には雑木が伸びていた。左から長男の直人、孫の雅登、私。
2021年9月19日撮影

［著者略歴］

吉田一郎（よしだいちろう）

一九四二年、長浜市国友町生まれ。
湖北アーカイブ研究所所長。
長浜市役所勤務のあと、長浜城歴史博物館館長、国友鉄砲ミュージアム館長などを歴任。カメラを持ち始めたのは市役所の広報担当職員時代から。父祖から受け継いだ田畑を耕作しながら、地元の暮らしや民俗を取材続ける。

主な著書、編著、監修に
ペンネーム国友伊知郎で著した
『北近江 農の歳時記』（サンライズ出版、二〇〇一年）、『湖北賛歌』（吉田一郎著作刊行会、二〇〇一年）が二冊セットで、第五回日本自費出版大賞を受賞（二〇〇二年）
編著『写真集 長浜百年』（長浜市）
監修『目で見る湖北の百年』（郷土出版社）
監修『写真アルバム　湖北の昭和』（いき出版）
ふるさと湖北を題材にした本が多数ある。

［企画・制作スタッフ］

企　画　小松明美　小西光代
編　集　三田村圭造
データ　橋詰知輝　高村洋司
　　　　吉田雅登
アートディレクション
　　　　古谷桂信
デザイン・DTP
　　　　堤理恵
写真展協力
　　　　國友武宏　廣瀬一實
　　　　前田重夫　俣野典子

地図から消えた村

琵琶湖源流七集落の記憶と記録

二〇二二年三月十五日　第一刷発行

著　者　**吉田一郎**

発　行　**湖北アーカイブ研究所**
〒五二六‐〇〇〇一
滋賀県長浜市国友町九一八
電話〇七四九‐六二‐四〇七四

協　力　**丹生ダム対策委員会**
余呉地域づくり協議会

発売元　サンライズ出版株式会社
〒五二二‐〇〇〇四
滋賀県彦根市鳥居本町六五五‐一
電話〇七四九‐二二‐〇六二七

印刷・製本　シナノパブリッシングプレス

©Yoshida Ichirou 2022 Printed in Japan

ISBN978-4-88325-755-3

禁・無断転載（本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は、著作権法上での例外を除いて禁じられています）本書に掲載された写真・記事の著作権は著者に帰属します。落丁・乱丁本はお取り替え致します。